

令和7年度
「はじめての100か月の育ちビジョン」
地域コーディネーター養成事業

モデル事例集

みんなで大切に『はじめての100か月』



令和8年3月

こどもまんなか
こども家庭庁

目次

この事例集では、「はじめの100か月の育ちビジョン」に基づき、こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増すために、全国各地で活躍している「地域コーディネーター」の活動事例を紹介しています。

自治体、幼児教育・保育施設、子育て支援に関わるモデル団体を中心に、日々専門的な立場でこどもの育ちを支えられている方から、地域住民や大学生を含む若者世代まで、様々な立場の方が地域コーディネーターとして活動し、各地域の実情を踏まえ、どのような活動が実践できるか試行錯誤を重ねてきました。本事例集では、団体職員や地域コーディネーター方の声とともに、活動の具体的な内容・実践のポイントを紹介しています。

この事例集をお読みにになった皆さんの地域でも、社会全体で「はじめの100か月」のこどもたちの育ちを支えるためにどのようなことができるか、そのヒントを見つけるために役立ていただけたら幸いです。

項目		ページ	
1	はじめに		
	「はじめの100か月の育ちビジョン」と社会全体でこどもの育ちを支える重要性	3	
	「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーター養成事業の概要	4	
	令和7年度「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーター養成事業の実施内容	5	
2	モデル団体の取組事例		
	今年度の地域コーディネーター活動事例の全体像	7	
モデル団体		カテゴリ	ページ
①	宮城県富谷市	自治体	8
②	石川県野々市市	自治体	11
③	愛知県長久手市	自治体	14
④	仙台こひつじ学園（宮城県仙台市）	認定こども園	17
⑤	柿沼学園（埼玉県久喜市）	認定こども園	20
⑥	株式会社ネクストビート（埼玉県所沢市）	子育て支援団体	23
⑦	特定非営利活動法人新座子育てネットワーク（埼玉県新座市）	子育て支援団体	26
⑧	特定非営利活動法人びーのびーの（神奈川県横浜市）	子育て支援団体	29
⑨	株式会社エルパティオ（愛媛県松山市）	子育て支援団体	32
⑩	有限会社ミューズプランニング（熊本県益城町）	子育て支援団体	35
	活動のノウハウ集		38
3	地域コーディネーター研修/地方キャラバンの開催報告		
	「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーターへの研修		42
	地方キャラバンの開催について		43
4	「はじめの100か月の育ちビジョン」の更なる推進のために		
	「はじめの100か月の育ちビジョン」の更なる推進のために		47
	監修者（事業運営委員）の紹介		48

1，はじめに



1 「はじめの100か月の育ちビジョン」と社会全体でこどもの育ちを支える重要性

「はじめの100か月の育ちビジョン」とは

こどもの誕生前から小学校1年生までが、だいたい100か月。

この「はじめの100か月」は、こどもの生涯にわたるウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に幸せな状態）の向上にとって最も重要な時期である。



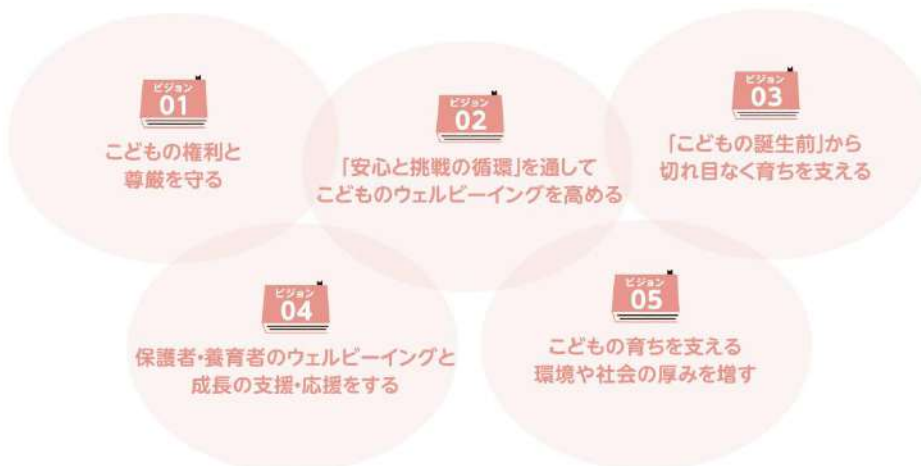
一方で、「はじめの100か月」の時期には、誕生から入園、入学の前後や、家庭・関係機関・地域などの間に、育ちの「切れ目」が数多くある。

こどもの育ちを切れ目なく



こどもの成長に応じた環境の変化が、育ちの「切れ目」にならないように、全てのこどもの「はじめの100か月」を社会全体で支援・応援していくため、「はじめの100か月の育ちビジョン」をまとめた（令和5年12月に閣議決定）。

具体的には、社会全体の全ての人と大切にしたい考え方として、以下の5つのビジョンを示している。



社会全体でこどもの育ちを支える重要性

このうちビジョン5では、「こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」として、こどもの育ちには、保護者・養育者に限らず、こどもと直接関わる機会がない人も含めた社会全体の全ての人々がそれぞれの立場で重要な役割を担っていることを示している。こどもと日常的に関わる機会がない人も、間接的に「こどもの誕生前から幼児期までの育ち」の支え手として、地域社会を構成し、社会全体の文化を醸成する一人であるものとしている。

このような、こどもと日常的に関わる機会がない人も含めて、こどもの「誕生前から幼児期まで」の時期を支えることを通じて、今をともに生き、次代をつくる存在であるこどもの生涯にわたるウェルビーイング向上を実現することは、社会全体の全ての人のウェルビーイング向上を持続的に実現するために不可欠な未来への投資である。

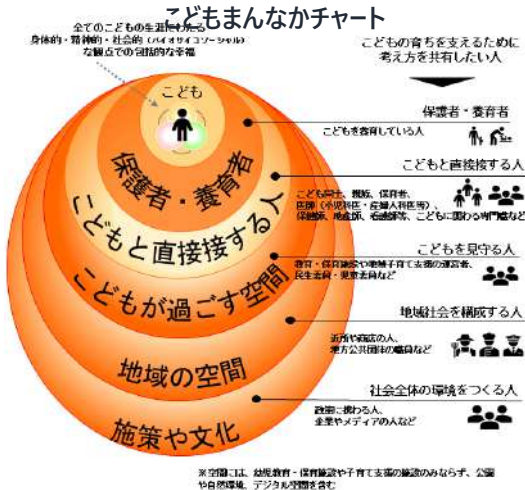
このため、本ビジョンをより多くの人と共有し、こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増していくことが必要になっている。

2 「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーター養成事業の概要

はじめの100か月の育ちビジョンにおける地域コーディネーターの位置づけ

（「はじめの100か月の育ちビジョン」本文 抜粋）

こどもの育ちの質には、保護者・養育者や、こどもに関わる専門職のみならず、全ての人が、それぞれの立場で直接的・間接的に影響している。（略）こどもの育ちに関する家庭や地域等の社会の情勢変化も踏まえて、現代の社会構造に合った発想で、こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増していくことが必要である。（略）地域において、「こどもまんなかチャート」の様々な立ち位置でこどもを支える人同士をつなぐ、コーディネーターの役割も必要である。



ビジョンの本文にある通り、地域コーディネーターには、「こどもまんなかチャート」の様々な立ち位置の人同士をつなぐ役割が期待されている。

特に、各地域でこのビジョンを広く周知していくことは、多くの地域住民と「はじめの100か月」の重要性についての認識共有を図ることにつながるものであり、こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増すうえで欠かせない。

また、若者や高齢者世代など、日頃こどもと関わる機会が少ない人を含め、多くの地域住民がこどもや保護者等と関わる機会を生み出すことは、幅広い地域住民のこどもの育ちへの関心を高め、「はじめの100か月」の育ちを地域全体で支え、応援する「こどもまんなか」のまちづくりにも繋がっていくものである。

地域コーディネーターに求められる役割

地域コーディネーターには、大きく2つの役割がある。

- ①各地域で「はじめの100か月の育ちビジョン」を多くの人に知ってもらい、小さな行動変容につながるように周知すること
- ②日頃こどもと関わりが少ない人も、こどもの育ちに関心を持つことができるように、こどもや保護者等との関わりや交流が得られる機会を、積極的に生み出していくこと

例えば、以下のような活動が考えられる。

- ①各地域で「はじめの100か月の育ちビジョン」を多くの人に知ってもらい、小さな行動変容につながるように周知する
 - ・保護者や地域住民の人に、ビジョンを知ってもらえるような場を設けるコーディネート
 - ・より多くの人にビジョンを知ってもらうため、周知への協力が必要な関係機関に働きかけるコーディネート
- ②日頃こどもと関わりが少ない人も、こどもの育ちに関心を持つことができるように、こどもや保護者等との関わりや交流が得られる機会を、積極的に生み出していく
 - ・日頃こどもと関わりが少ない若者世代と、乳幼児期のこども・保護者等との関わりを生み出すためのコーディネート
 - ・日頃こどもと関わりを持つ機会が少ない地域住民にも声をかけ、「はじめの100か月」の親子等が集まる場に様々な世代の地域住民が参加できるようにすることで、こどもの育ちへの関心を高められるよう働きかけるコーディネート
 - ・多世代交流の場に集まる参加者同士の、関わるの質を高めるためのコーディネート など

地域コーディネーターには、このような活動の中核を担う存在として、「はじめの100か月の育ちビジョン」を踏まえ、地域の関係者と連携して取組を推進することが求められている。

実践のポイント

- ✓ 全く新しいこと / 大規模でなくても良い ...すでにある活動と上手く組み合わせながら、実践することも大切
- ✓ 「大きな広がり」を生み出す視点と、「受け皿」の視点
...より多くの人に関心・つながりを得られるよう働きかける「大きな広がり」の視点と、そこで得られたつながりを、日常的な取組に根付かせ、継続させていくための「受け皿」の視点の両方が重要

3 令和7年度「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーター養成事業の実施内容

モデル団体・地域コーディネーターの選出

本事業の2か年目となる令和7年度は、全国の10団体（地方公共団体：3団体、民間団体：7団体）がモデル団体となった。

以下の10団体（以降、モデル団体という）において、地域コーディネーターを選出し活動が展開された。

モデル団体

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------|
| 1 宮城県富谷市 | 6 特定非営利活動法人びーのびーの
（神奈川県横浜市） |
| 2 仙台こひつじ学園（宮城県仙台市） | 7 石川県野々市市 |
| 3 柿沼学園（埼玉県久喜市） | 8 愛知県長久手市 |
| 4 特定非営利活動法人新座子育てネット
ワーク（埼玉県新座市） | 9 株式会社エルパティオ（愛媛県松山市） |
| 5 株式会社ネクストビート（埼玉県所沢市） | 10 有限会社ミューズプランニング
（熊本県益城町） |

モデル団体における実践の概要

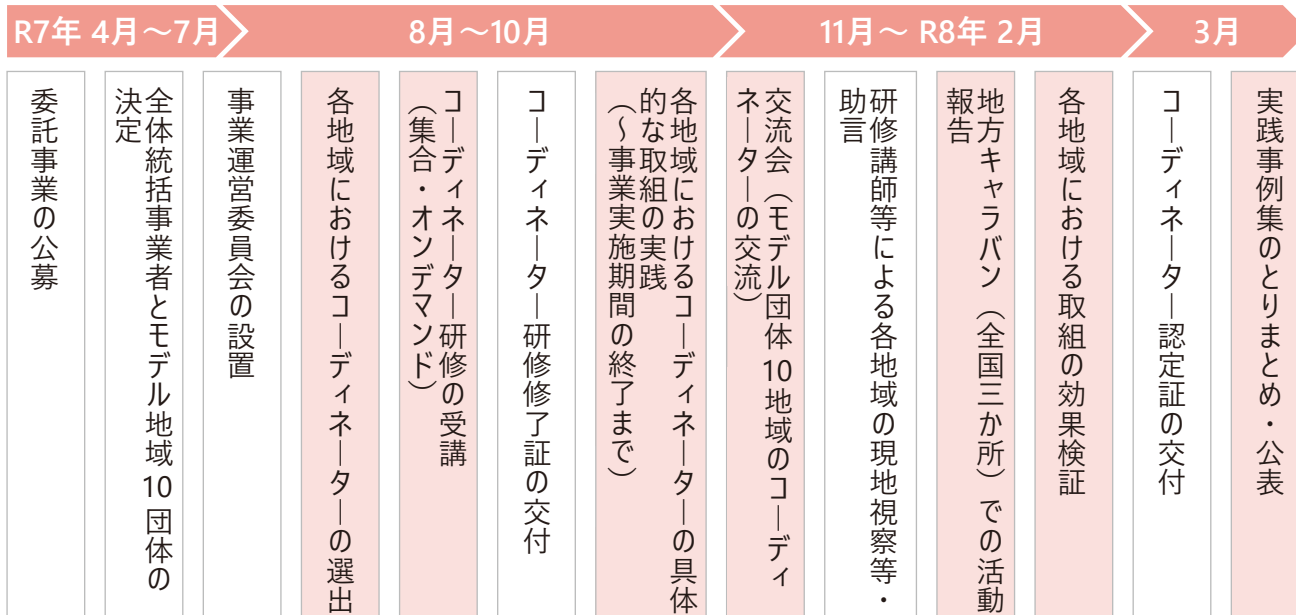
地域コーディネーターは、コーディネーター研修での学びを経て、各地域の特性やニーズ、活用できる人材や地域資源を改めて掘り起こし、活動の企画書を作成。活動拠点となるモデル団体とも連携しつつ、これまでの経験や、コーディネーター自身の持つネットワークを活かして活動を実施してきた。

各モデル団体は、地域コーディネーターのバックアップや、地域コーディネーターと協力して活動の実践を進め、その間、毎月の活動報告や、事業運営委員による現地視察等におけるフィードバックを踏まえ、定期的な活動の振り返りや計画の見直し等を行ってきた。

このような活動で得られた成果を、全国3か所で開催された地方キャラバンで対外的に発信するとともに、他団体の地域コーディネーターやモデル団体同士での交流を通じて、互いの事例から学び合い、活動の継続やさらなる発展に向けた検討を重ねてきている。

以降のページでは、各モデル団体や地域コーディネーターのこれまでの活動の軌跡を詳しく紹介している。

1年間の活動スケジュール



2，モデル団体の取組事例



1 今年度の地域コーディネーター活動事例の全体像

なぜ地域コーディネーターの養成に取り組もうと思いましたか？

- 子育てに直接関わる機会が少なかった大学生や高齢者、企業関係者などを地域コーディネーターとして育成し、**多様な主体が子育てに参画できる体制を整えることで、子育て支援の新たな担い手を創出**したいと考えました。また、**子ども自身も意見を表明し、社会の一員として参画できる地域**を実現したいと思い、本事業に申請しました。 →p.14 (愛知県長久手市)
- これまでの産後ケア事業や保育事業の現場での実践を通じて、支援を増やすこと以上に、**地域の中で支援を「つなぐ人」の存在が不可欠**であると考えました。**制度と家庭を結び、支援を「特別なもの」ではなく、日常の文化へと変えていきたい**と思い、地域コーディネーターの養成に取り組むことにしました。 →p.32(株式会社エルパティオ)
- 熊本地震から10年という節目を前に、「住み続けたい・次世代に引き継ぎたいまち」の実現と、町民一人ひとりのウェルビーイング向上、そして持続可能なまちづくりを目指したい**と考えたことが本事業に申請した理由です。 →p.35(有限会社ミュズプランニング)

どんな人が地域コーディネーターとして活躍していますか？

- 子育て中の父親が地域コーディネーター**となって親子で参加できるイベントを行ったり、**こども園の園長が地域コーディネーター**となり、こども園を拠点として高齢者とこどもの交流を図る取組を実施しました。 →p.11(石川県野々市市)
- こども園の職員が地域コーディネーター**となって、高校生の探求学習と連携した取組や、こども園の既存行事で障害者福祉施設と連携した取組を展開するなど、**園を地域に開くことで、多世代の地域住民との交流を図る活動**を実施しました。 →p.17(仙台こひつじ学園)
- 地域保育学科の大学生が地域コーディネーター**となり、大学の学園祭などを活用して、親子が楽しめる遊びの場を企画したり、**学生と親子が積極的に関わりを持てるような活動**を実施しました。 →p.23(株式会社ネクストビート)
- 子育て支援センターや地域子育て支援拠点など、**普段から子育て支援で活躍する方が地域コーディネーター**となり、**各自の拠点での活動やネットワーク**を活かして、乳幼児親子と地域住民との交流機会を創出しています。 →p.26(新座子育てネットワーク)

活動を通じて、どのような成果がありましたか？

- 親子にとっては**孤立感の解消**、高齢者にとっては**社会とのつながりの維持**、学生にとっては**子育て意識の向上**、地域にとっては**子どもを大切に思う気持ちの向上**など地域コミュニティの絆を強化し、誰もが安心して暮らせる地域社会づくりに寄与しました。 →p.8(宮城県富谷市)
- 子育て世代**は先輩世代に相談・協力を得ることで**子育てへの余裕**が生まれ、**高齢者世代は乳幼児と接する機会の増加**により**生活に活気や彩り**がもたらされました。**若者世代**は地域イベントへの参加を通じて**多世代交流が進み**、結果として、**全世代がこどもの成長を地域全体で喜び合える社会づくり**につながりました。 →p.20(柿沼学園)
- 多様な世代、立場の方々が構成されている地域コーディネーターが参画**することにより、法人スタッフだけでは気づき得なかった視点からの意見や活動の広がりが見られ、「**地域全体で子育てを支えていく**」という目標に**近づく**ことができました。 →p.29(びーのびーの)

宮城県富谷市

自治体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- 本市が有しているとみや子育て支援センターはこども家庭センター（母子保健担当）を担っていることに加え、ユニセフ日本型「子どもにやさしいまちづくり事業（CFCI）」実践自治体の事務局も担っている。このことから、こどもに最も近い存在である保護者や養育者に対して「はじめの100か月の育ちビジョン」を効果的に展開できるのではないかと考え、とみや子育て支援センター職員（保健師・保育士）をコーディネーターとして配置することとした。また、社会の裾野を広げていくという観点から、シルバー人材センターと起業塾（富谷塾）出身の企業代表者も受講していただいた。

この事業を通して目指したい姿

子どもにやさしいまちづくり事業（CFCI）実践自治体として子どもの権利条約に基づき、市役所全庁横断的に子どもにやさしいまちづくりに取り組んでおり、**今後は市民を含めたオール富谷で更なる推進を目指す。**

本事業においては、本市が推進するCFCIの目的でもある「子どもの生涯にわたるウェルビーイング」を狙いとしていることから、本市が取り組む**CFCIと一体で取り組むことにより、より効果的な推進と、持続可能な地域モデルとして全国展開の一助となることを目指す。**

地域コーディネーターの構成・役割

- 母子保健担当職員：こどもの生涯にわたるウェルビーイングを高められるよう多様な地域資源に着目し、関係機関と連携を図りながら実施体制を構築した。
- シルバー人材センター・民間企業：ワークショップやファッションショーなどの事業を企画・運営し、その実施に従事した。

どのように本来の業務と両立を図っているか

- 既存の事業を活用し、100か月ビジョンの周知に努めた。
- 通常業務を行いながら、関係機関同士連絡を取り、一つ一つの業務を確認しあい進めていった。

活動地域の概況・課題

○活動地域：宮城県富谷市

- 面積 49.18km²、人口 52,460人（R8.2.28時点）
- 国内で初めて「子どもにやさしいまちづくり事業実践自治体」に承認された。

○地域の課題

- 遠方からの転入により、支援が得られにくい方が多い。
- 核家族化や女性の社会進出等の社会環境の変化により、様々な悩みや育児不安を抱える家庭が増えてきている。

活動の運営体制

とみや子育て支援センター職員（所長・副所長・保育士・保健師）やシルバー人材センター、民間企業から地域コーディネーターを選出し、それぞれの強みを活かしつつ協働して本事業を推進している。

地域コーディネーターのメンバー構成

- とみや子育て支援センター 職員 4名
- 民間企業（再委託先） 代表 1名
- シルバー人材センター 副参事 1名

地域コーディネーター事業に取り組んでみて感じたこと

本市は「子どもにやさしいまちづくり」に向けて、市民・地域社会を含めたオール富谷でさらなる推進を目指している。こうした背景のもと、本年度は多世代交流を軸に、シルバー人材センターや民間企業を巻き込みながら事業を実施した。取り組みを通じて、**保護者には子育てへの不安や孤立感の解消、地域への信頼、学生には地域で子育てを支える視点、やがて親になる意識の醸成や大切に育てられた思いの再認識、高齢者には役割や居場所の創出、その他の地域住民には地域のこどもへの愛着形成など、様々な立場の人々のウェルビーイングにつなげることができた。**多様な主体が関わることで、**地域全体においてこどもにやさしい子育て環境が着実に広がっていること**を実感している。

団体職員の方の声

Q：なぜ富谷市で「はじめの100か月の育ちビジョン」の周知や、地域コーディネーターの養成が必要だと感じたのですか？

本市は、ユニセフ日本型「子どもにやさしいまちづくり事業」実践自治体として承認を受け、全庁挙げて取組を進めております。また、その事務局である子育て支援センターでは、母子保健事業を担い、乳幼児期の健やかな育ちの支援を行っているため、子どもにやさしいまちづくり事業の一環としてビジョンの内容に共感し、周知啓発していくこととしました。

Q：自治体が地域コーディネーターの活動を主導することには、どんなメリットや強みがあると感じますか？

乳幼児健診や子育て講座等を定期的に行っていることにより、参加者にもれなく周知啓発できる強みがあります。また、日ごろから本市に関わりのある団体や企業、大学等の協力を得て連携することにより、活動の広がりが期待できます。

Q：どのようにしてシルバー人材センターや民間企業との協働が実現したのですか？

シルバー人材センターは子育て講座等における託児業務を委託しており、民間企業は本市が行う起業塾出身であることから、つながりがありました。また、シルバー人材センターと民間企業は、大学と連携し、昨年度大学生と高齢者の協働企画であるあばのためのファッションショーを実施していたことにより、今回の事業につながりました。

とみや子育て支援センター職員



宮城県富谷市の紹介

事業を担当したとみや子育て支援センターは、妊娠期から子育て期まで切れ目のない母子保健施策を展開し、母子健康手帳交付や妊産婦健診、産後ケア、乳幼児健康診査、予防接種、発達支援事業などを実施している。あわせて、遊びのひろばや子育て講座、子育て情報発信、育児サークル支援等を通じて、子育て家庭の身近な相談・交流の場づくりに取り組んでいる。また、子どもにやさしいまちづくりを推進するCFCI事業の事務局として、関係機関と連携した取り組みを進めている。



とみや
富谷市
Tomiya City

取組事例① 乳幼児健診や子育て講座等におけるビジョンの周知啓発

大学生

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

子育て支援センターで行われる母子健康手帳交付や各乳幼児健診、また既存の子育て講座などの機会を活用し、地域コーディネーターである保育士を中心に100か月ビジョンのリーフレットを用いて説明し、周知啓発に努めている。

●活動の成果

ご夫婦でお越しになる方や祖母も一緒に参加される方々も増えており、性別や年齢を問わず幅広く周知を図ることができた。

●今後の展開

母子健康手帳交付や乳幼児健診、各種子育て支援事業において、はじめの100か月の育ちビジョンの周知啓発を継続する。

また、社会の裾野を広げるため、こどもと直接関わる機会の少ない地域住民にも100か月ビジョンを効果的に周知啓発できる方法を検討する。

<周知のターゲット・方法>

- ① 母子保健事業に関わるスタッフの理解促進
- ② シルバー世代への理解促進
- ③ 若者世代への理解促進
- ④ 母子保健各種事業における保護者への周知啓発
- ⑤ 取組を通じた地域社会への周知啓発
- ⑥ 子どもにやさしいまちづくりフォーラム
(3/15開催)



取組事例② 100か月×100歳 手仕事繋ぐ世代の交流 リメイク工房

大学生

地元企業

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

妊娠期から100か月までのこどもとその保護者が持ち寄った思い出の詰まった衣服や親から受け継いだ着物などを元気な100歳を目指すシルバー人材センターの高齢者がリメイクをする企画である。そこに大学生も参加し、こどもと遊び、交流を深めたり、持ち寄った衣類のエピソードや想いを聞き取った。

匠の技により、ベビー服や着物が洋服や小物へとリメイクされ、親子は完成した作品に喜びを見せ、発表会に向けて期待が高まる取組となった。

●活動の成果

- ・親子にとっては孤立感の解消や、子育てに対する不安・負担の軽減につながった。
- ・高齢者にとっては、地域の中での役割や居場所を再認識する機会となり、社会とのつながりを維持・促進する効果が見られた。
- ・大学生にとっては、こどもを身近に感じる経験となり、こども(家族)の愛着を確認できる機会となった。

●今後の展開

今後は、新たな親子や若者世代との交流をさらに広げるとともに、地域の新たな社会資源との連携を図りながら、世代間交流事業の継続と発展に努めていく。



地域コーディネーターの声

Q：乳幼児親子や地域住民の方にビジョンを伝える中で、どのような成果がありましたか？

「本当に大切なビジョンなのでもっとたくさんの人に知ってもらいたい」といった声や、「こども、保護者、学生、高齢者にはスポットを当てやすいが、50～60代の大人が地域に貢献できる機会が少ないと感じるので、その年代の方たちも参加できるような場があると嬉しい。地域にはこどもと関わりたいと思っている人がたくさんいる。」という心強い声が聞かれ、地域コーディネーターとして、背中を押していただきました。

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どのような発見がありましたか？

- ・高齢者の持つ知識や経験が若い世代へと伝わることで、地域全体で助け合い、支え合う気持ちが育まれていくことを実感しました。
- ・はじめの100か月親子のウェルビーイングの向上を目的に実施しましたが、高齢者及び学生にとってもそれぞれにウェルビーイングをもたらすことがわかり、世代間交流である本事業を通して、子どもにやさしいまちづくりが誰にでもやさしいまちづくりにつながるということを実感できました。
- ・他の様々な事業においても横のつながりをもち展開することで、社会の厚みを増すことができる取組になると考えられます。

とみや子育て支援センター職員



委員からのコメント

今回の富谷市の活動は子育て支援の継承という意味では意義深いものであったと考える。各年代を繋ぎ合わせる仕組み、そして、それら子育ての共同によりその意味を考えたり、感じたりしたことは大変すばらしい取り組みであった。特に服をリニューアルするという日本の伝統的な手法とともに地元の学生たちが中心になり発表会を進行していることなど秀逸の活動であった。このような活動が全国に展開することを強く望むものである。富谷市の益々の活躍を心より期待するものである。



社会福祉法人清隆厚生会 理事長
認定こども園ひがしどり園長
坂崎隆浩

取組事例③ 100か月×100歳 手仕事繋ぐ世代の交流 発表会

大学生

地元企業

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

高齢者がリメイクした衣類や小物をこどもたちが身に着け、ファッションショー「TOMIYA COLLECTION」を開催した。当日は地域住民の参加を得て、「はじめての100か月の育ちビジョン」の説明とあわせてファッションショーを観覧してもらい、本取組の趣旨や内容について広く周知を図った。

●活動の成果

- ・学生にとっては子育てに対する具体的なイメージを形成する機会となり、地域でこどもを育てていく意識の醸成につながった。また、地域全体においても、こどもを大切に思う気持ちや地域への関心が高まるなど、こどもを中心としたまちづくりへの意識向上が見られた。

●今後の展開

子どもの権利条約に基づいた「富谷市子どもにやさしいまちづくり事業実践自治体」として、オール富谷で子どもにやさしいまちづくりを推進し、その一環として「はじめての100か月の育ちビジョン」の普及啓発に引き続き取り組む。



活動に参加した方の様子・声

「はじめての100か月」のこども

保護者

- ・リハーサルの日から発表会を心待ちにしていた
- ・お気に入りのポーズを決めながらランウェイを歩いて楽しかった

- ・こどもたちを主体にした事業で、とても楽しく参加できた
- ・核家族が増える中で、地域の方との交流が心強かった

高齢者世代

大学生

- ・多世代で関わり、協力しながらひとつのものを作り上げる機会に携わることができ、貴重な経験になった
- ・学生の頑張りが素晴らしく、心を打たれた

- ・子育ての良さ、大変さ、やりがいに気付くことができ、子育てに興味がわいた
- ・子育てすることに自信がなかったが、今回の事業に参加して、子育てに対するハードルが低くなった

地域コーディネーターの声



シルバー人材センター 職員
民間企業（再委託先）代表

Q：取組を進める中で、苦労した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

- ・想定していたより参加者が集まらず、事業日時の設定や周知方法が課題でした。
- ・こどもとの関わり方を、場面を捉えながら具体的に知らせていったことで、回を重ねるごとにこどもと学生との距離が縮まり、関係性が深まっていきました。

Q：この取組によって得られたつながりを、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

- ・この取組の成果を「はじめての100か月の育ちビジョン」とともに周知し、地域における世代間交流等の大切さを伝えていきたいと思っています。
- ・他の事業を展開するうえで、このつながりを大切にして幅を広げ、社会の裾野を広げていきたいです。
- ・それぞれの世代でのニーズを把握し、子育てサポートや地域活動のボランティアなど多様な役割を提供することで、参加者がやりがいをもって活動し、居場所や生きがいを見つけられるよう地域コーディネーターとして活動していきたいです。

実践のポイント ～取組の工夫や関わりの中で意識していたこと～

- ① こどもの尊厳を守るためにはこどもにとって最も身近な保護者の意識が重要であることから、**自治体として母子保健事業の担当である強みを活かし、既存事業においてすべての対象者にもれなくビジョンの周知を行った。**
- ② 他自治体でも取り組みやすいよう、**全国どこの自治体にもあるシルバー人材センターと連携した。**また、**近い将来親になる世代の学生が参加**することで、こどもや子育てへの関心を高めるとともに、プレコンセプションケアの一助にもなった。
- ③ 参加者との**話し合いを密にし、アイデアを尊重し、主体的に参加できる機会**を提供した。また、**自分の役割を認識し、やりがいを感じて事業に取り組めるようサポートした。**

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・親子にとっては孤立感の解消、高齢者にとっては社会とのつながりの維持、学生にとっては子育て意識の向上、地域にとってはこどもを大切に思う気持ちの向上など**地域コミュニティの絆を強化し誰もが安心して暮らせる地域社会づくりに寄与した。**
- ・**世代を超えた交流を持続させ、多様な世代が関わり続ける場を創出するための取り組みが必要である。**
- ・参加意欲や関心が高まりにくい層に対しては、**はじめての100か月世代が多く利用する場を活用した周知・啓発**を行うとともに、**こどもに関心の薄い層にもビジョンが伝わる工夫**を今後検討していく必要がある。

今後の活動の展望

- ・新たな親子や若者世代との交流を促進することや、新たな社会資源とリンクし世代間交流事業の継続に努める。
- ・乳幼児健診や各種子育て支援事業におけるビジョンの周知啓発を継続する。

石川県野々市市

自治体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- ・昨年度、本事業の採択団体であった一般社団法人はぐネットは、「こどもをまんなかに手をつなごう」を合言葉に10年以上の活動実績や本市との協働実績を有す。
- ・本市のこども計画では、「次代を担う子ども・若者の幸せと子育てしやすい環境づくりを『地域が一体となって』育む」ことを掲げており、本市のビジョンと(一社)はぐネットの活動内容が合致したことから、昨年度の実績を土台とし、今年度は本市が採択団体として(一社)はぐネットの活動をバックアップし、具体的な取組推進を(一社)はぐネットに再委託する形で本事業に申請した。

活動地域の概況・課題

○活動地域：石川県野々市市

- ・面積 13.56 km²、人口 54,791人 (R8.2.28時点)
- ・石川県のほぼ中央、金沢平野東部に位置するコンパクトな都市である。
- ・県内平均と比較すると高齢者人口比率が低く、子育て世代や核家族世帯が多い。

○地域の課題

- ・核家族・共働き世帯が多いことから、子育てで孤立したり、頼れる人がいなかったりと、共助のコミュニティ形成に課題がある。

この事業を通して目指したい姿

昨年度、(一社)はぐネットが実施したモデル事業では、子育て家庭と地域の人々の交流機会の創出に取り組む中で、父親や高齢者世代の参画が少ないことが課題として見えてきた。今年度の事業を通して、より幅広い主体の交流機会への参画を促進し、活動の裾野を広げることで、**本市のこども計画で掲げる「次代を担う子ども・若者の幸せと子育てしやすい環境づくりを地域が一体となって育むまち、ののいち」の実現を目指す。**

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

父親やシニア世代の参画が少ないという課題に対応するため、本事業で活動を展開する中で、父親やシニア世代の参画を促す、ネットワークを広げるといった観点から親和性が高いと考えられる方を対象として地域コーディネーターへの声掛けを行った。

地域コーディネーターの募集方法

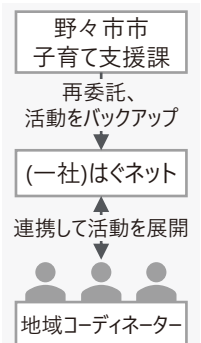
(一社)はぐネットの職員を通じて、団体や職員とつながりのあった方に、本事業について案内し、コーディネーターとして参画してもらえんか打診した。

活動の運営体制

(一社)はぐネットの職員2名に、今年度から新たに属性の異なる3名の地域コーディネーターが加わり、(一社)はぐネット職員と協働し、活動を展開した。本市子育て支援課は、活動の全体統括及びバックアップを行った。

地域コーディネーターのメンバー構成

- 2児の父親 1名
- 大学生 1名
- こども園園長 1名



地域コーディネーター養成事業に取り組んでみて感じたこと

本市と(一社)はぐネットが協働して本事業に取り組んだことで、昨年度の課題となっていた「シニア世代の交流機会への参画の少なさ」へのアプローチとして、**社会福祉協議会の協力を得ることにつながった。**社会福祉協議会側にも乳幼児との交流機会に対するニーズがあることがわかり、相互のニーズが合致する形で、社会福祉協議会を通して募集したシニア世代の方々に、本事業で実施した交流機会に参画してもらうことができた。また、今年度から**多様な属性の地域コーディネーターに参画してもらった**ことで、学生と子育て中の父親の交流の機会を創出したことや、父親を対象とした交流機会の参加者の中から、ボランティアとして今後も継続して関与したいという方が現れる等、**参加者から担い手に移行していく好事例も生まれた。**

団体職員の方の声

Q：どのようにして団体と市の協働が実現したのでしょうか？

令和6年度ははぐネット主体で、本事業の採択で実施しました。成果報告会で事業の成果と野々市市と共同するメリットを本市に提案し、本市のこども計画の方向性と一致する取り組みにおいて、協働が実現しました。



一般社団法人はぐネット
代表理事

Q：市と団体が協働することのメリットや強みはどんなところにあると思いますか？

団体はアイデアやスピード感、地域に根差した専門的なネットワークがある一方、自治体は行政活動を通じた地域との信頼関係や行政としての地域づくりに欠かせないネットワークの基盤があることから、協働することで、互いの強みを生かした効果的な事業実施が可能となりました。

Q：地域コーディネーターの方の関わりによって、団体の活動にどんな変化がありましたか？

これまでのはぐネットは、主婦層のスタッフが中心で、大学生がインターンとして関わる体制でした。今回は現役の父親層やシニア世代など属性や世代の異なるメンバーが加わることで視野は広がり、活動の幅や深みが増しました。



石川県野々市市
担当者

石川県野々市市の紹介

本市では基本理念に基づき、教育・保育、地域子ども・子育て支援事業の提供体制の確保や、こどもや子育てに関連する業務の円滑な実施に取り組んできました。令和7年度に策定した「野々市市こども計画」では、本市の現状と課題を考慮し、(1)乳幼児期の教育・保育サービスの確保と充実、(2)切れ目のない子育て支援サービスの提供、(3)子育ての孤立を防ぐ取組の充実、(4)こども・若者と子育てを家庭を支える地域づくりを重点事業として設定しています。



取組事例① 「パパと子どもであそぼう！けんちくあそび体験会 ～カプラで“親子ビルド”しよう～」

その他
地域住民

●取組内容

建築家をゲスト講師に迎え、カプラ（積み木）を使った建築遊び体験に「父親と子ども」で取り組んだ。父親と子どもだけの参加を推奨することで、保護者のニーズ（母親の自由時間確保）に応える設計とした。活動は2部構成とし、第1部では父親と子どものペア作業、第2部ではグループ作業（30分間）として、参加者全体で「住みたいまちづくり」を行った。最後に振り返りの時間を設け、「子どもまんなか」や「父親と子ども時間」の意義を共有し、参加者がビジョンへの理解を深めるよう工夫した。



●活動の成果

- 参加者からは「こどもの想像力の豊かさに驚かされた」、「こどもの普段見ない一面が見られて良かった」という感想が得られ、父親がこどもの新しい側面や成長を発見することにつながった。
- 「よその家庭の父親のこどもの接し方を拝見する良い機会となった」との意見もあり、地域の子育てにおける多様な関わり方を学ぶ機会も提供できた。



●今後の展開

イベント後も継続的な関心を示した約半数の父親層をコミュニティ化し、今後の企画などを通じて継続的な活動の基盤を築く。

取組事例② めった汁パーティー

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

地域の高齢者（60代～70代後半）をこども園に招き、3歳児から5歳児の園児が混ざった縦割りグループとともに、調理と食事を通して交流を図った。参加した高齢者を対象に、こどもたちと関わる前に、地域コーディネーターからビジョンや今回の企画の意図について説明する機会を設けた。

活動は事前イベント（調理・交流）と本イベント（めった汁パーティー）の2部構成とし、事前イベントでは、年長児とシニアと一緒に野菜を切る調理体験を行った。本イベントでは、こどもたちとシニアがともにめった汁を味わった。



●活動の成果

- 社会福祉協議会の協力を得て、地域の人々を活動に巻き込むことができた。
- 事前アンケートで約9割（12名中11名）の高齢者が、普段は0歳～5歳の乳幼児と接する機会が「ほとんどない」状況であったが、本活動を通じて地域のこどもたちから直接パワーや元気をもらおうというポジティブな変化が生まれた。
- 「はじめの100か月の育ちビジョン」を周知する機会となった。



●今後の展開

特定のボランティアに負担が偏らないよう、徒歩圏内に住む高齢者を募る方針として、地域内での持続可能な協力体制を築く。

地域コーディネーターの声

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

- 子育てを通じて、母親の負担の大きさを実感しました。ママたちに少しでも自由な時間が生まれたらいいなと思い、地域で協力することでそれが実現すると思ったからです（こども園園長）。
- カッコいいパパになりたかったからです（2児の父親）。
- 自分自身が地域に育てられたので、恩返しがしたかったからです（大学生）。



地域コーディネーター

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気づきがありましたか？

- 地域の方々とイベントを通じて様々な状況や悩みがあることを知り、より住みやすい街づくりに関わりたいと思いました。活動に関心がある方もいるが、活躍する機会が少ないことも気づきました。

委員からのコメント

令和6年度の採択団体だった「はぐネット」の活動をベースにして、令和7年度は「野々市市」が受託したことで、新たな団体との連携や多世代のつながりという相乗効果が生まれた。行政の事業運営を柱にして、高齢者との接点が多い社会福祉協議会との連携が実現し、「個」のつながりだけでなく、「組織」として多世代との橋渡しが実現したことは、地域の人材の掘り起こしという観点においても大きな役割を果たすことになった。子育て支援団体と行政との連携が一層深化した好事例として評価できる。地域コーディネーターとして当事者の父親や保育施設責任者などの多様な人材が新たに関わり、「こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」という『100か月ビジョン』の理念実現に向けて、具体的な課題を顕在化させながら、事業を展開することができた。

NPO法人グリーンバブプロジェクト
代表理事 吉田大樹

取組事例③ 100年すごろく

大学生

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

3歳から小学3年生までの親子を中心に、学生や父親、高齢者のボランティアと自然に交流できる多世代交流型のイベントを実施した。来場者である子ども自身がすごろくのコマとなり、スタートを0歳、ゴールを100歳として、人生のライフステージを体験しながら進んでいく。すごろくは3つのステージ（学生・パパ・高齢者）に分かれており、各ステージでボランティアと一緒にのみくじやカプラ積み上げ対決、折り紙体験などを通して交流を楽しんだ。イベントの1週間前に、事前イベントとしてボランティア同士が交流できる機会も設け、各自の人生で記憶に残っている出来事を出し合い、イベント当日に使用するすごろくのマス目の内容を作成するワークショップも実施した。



●活動の成果

- 昨年度のイベントや別のイベントへの参加者が、ビジョンの存在を知っていたことから、イベントへの参加が、ビジョンの浸透に大きな効果をもたらすことが示された。
- 普段接点のない学生や高齢者が予想以上に子どもに関わってくれたという肯定的評価が多数得られた。

●今後の展開

イベント運営の属人化を防ぐため、個人への依存から社協等との組織間連携へ移行した体制や、運営ノウハウのマニュアル化を継続し、誰でも運営可能なモデルにしていく。

活動に参加した方の様子

「はじめの100か月」の子ども

- お兄ちゃん、お姉ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんが一緒に遊んでくれて楽しかったよ
- 乳幼児が自ら高齢者に抱っこされに行っていた

保護者

- 核家族の我が家にとって、学生や高齢者との関わりの機会は、意図的に生み出さないと生まれません。このような機会をもっと作ってほしい
- 学生や高齢者が子ども達のために一生懸命活動してくれるのが嬉しかった

高齢者世代

- 子ども達を見ているだけで元気がもらえました
- 孫も大きくなり、小さい子達と関わる機会は非常に少ないため、とても楽しかったです
- 子どもたちと触れ合ったり、親御さんと話をすることで、ライフキャリアを考えるきっかけになりました
- 自分もかつて大切に育てられたことを振り返るきっかけになりました

地域コーディネーターの声



昨年度地域コーディネーター

Q：取組を進める中で、苦労した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

コーディネーター自身が高齢者とのつながりが薄く、当初は協力者を見つけることに苦労をしました。市職員との協働で地域のキーパーソンとつながることができ、活動の意図を伝えながら対話をかさねることで、連携を広げることができました。

Q：この取組によって得られたつながりを、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

小さくとも継続的な取り組みが必要です。自分にできる範囲で参加していくことで周囲の人も「自分もできるかも」と感じてもらえるようになり、仲間が増えていくと考えています。

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① 地域のイベントに参加したり、小規模のイベントを通じて信頼できるコミュニティを作りだし、互いをつなげていくことで広がりを持たせる。
- ② 社会福祉協議会などと連携し、社会的つながりを持とうとしている地域のキーパーソンを核として、活動の参加者を増やす。
- ③ こどもの最善の利益を最優先とし、関係機関や参加者のメリットを明確に、活動に参加するきっかけづくりに注力した。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- こどもの利益が最重要であることは前提として、参加者側のニーズにも着目することで、ニーズと活動をマッチングさせ、様々な地域住民を活動に巻き込むことができた。
- 地区にある伝統行事などを発掘し、新たな意味や文脈を上乗せしたり、捉え直したりすることで、活動内容は同じであっても、本事業で実施する取り組みに活用したりかけ合わせたりすることができ、活動の幅を広げることにつながった。

今後の活動の展望

- 子育て中の父親が持つまだ顕在化していないニーズを発見し、今後の活動と父親のニーズをつなげる。
- 「小学校区」の身近な範囲で、交流やつながりを深めるため、すでにある地域資源を発見し、今後の活動とつなげる。

愛知県長久手市

自治体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- 子育てに直接関わる機会が少なかった大学生や高齢者、企業関係者などを地域コーディネーターとして育成し、多様な主体が子育てに参画できる体制を整えることで、子育て支援の新たな担い手を創出するとともに、子ども自身も意見を表明し、社会の一員として参画できる地域を実現するべく本事業に申請した。

活動地域の概況・課題

○活動地域：愛知県長久手市

- 面積 21.55km²、人口 61,619人（R8.2.28時点）
- 公立校12校・私立校3校（大学を含む）を有する。
- 平均年齢の若さや高齢化率の低さは愛知県内1位となっている。

○地域の課題

- 子育て世代の転入世帯が多く、子育て家庭が孤立してしまう。
- 共働き世帯が多いことや市外に勤務する人が多く、コミュニティへの参画が困難である。

この事業を通して目指したい姿

はじめの100か月の育ちビジョンの理念を地域に広め、地域全体で子育てに関わる人や場所を増やすことを目指す。子育て世代の転入が多く、知り合いや頼れる人がいないまま子育てが始まる家庭があるという課題に対し、①市民への理念の周知と意識啓発、②大学生・高齢者・企業関係者など多様な主体の参画促進と子どもの意見表明の機会づくり、③地域全体で支えるネットワークの構築による子育て家庭の孤立防止を目指す。

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

地域において子育て支援の新たな視点をもち、具体的な活動を推進できる人材として、市民活動の拠点である公共施設に勤める職員、地域活動や子育て支援に関心のある地元企業の経営者、Uターンして地元で開業した市民を地域コーディネーターとして選出した。

地域コーディネーターの募集方法

特例認定NPO法人ながいくの職員を通じて、団体や職員とつながりのあった方に、本事業について案内し、コーディネーターとして参画してもらえないうかが打診した。

活動の運営体制

団体職員に加え、地域の店舗経営者等から選出した地域コーディネーターの育成を再委託団体（特例認定NPO法人ながいく）が実施した。本市子ども政策課は活動の全体統括及びバックアップを行った。

地域コーディネーターのメンバー構成

- 店舗経営者 2名
（地元企業の経営者、Uターンして地元で開業した市民）
- 公共施設職員 1名



地域コーディネーター事業に取り組んでみて感じたこと

本市と特例認定NPO法人ながいくが連携したことによって、今まで子育てに直接関わりの少なかった人や行政の働きかけのみでは行き届かない人を巻き込むことができた。また、普段から現場に立っている特例認定NPO法人ながいくの職員や地域コーディネーターが有する知見などを持ち合わせ、協働することで、子育て家庭や地域住民を対象としたイベントの企画や運営がより良いものとなった。

団体職員の方の声

Q：長久手市と団体が連携して活動する中で、どのような気づきや活動の広がりがありましたか？

行政は、【啓発ツール（市公式LINE、公式メール）、庁内他部署との内部調整】を行い、団体は、【関係団体とのコネクション、LINEオープンチャットを通した幅広い対象への呼びかけ、イベントの企画・運営のノウハウ等】と、それぞれの得意なこと・モノを活用することで、単体ではしなかった幅広い対象の参加・啓発を可能にしたと思います。



NPO法人ながいく
理事 古賀めぐみ

Q：地域コーディネーターの方の関わりによって、団体の活動にどんな変化がありましたか？

コーディネーターの方に地域の様々な機関や団体をおつなぎいただいたことで、これまで接点のなかった分野との連携が生まれ、活動の幅が大きく広がりました。また、第三者の視点から、当団体の活動は気軽に参加しやすい雰囲気があること、楽しさを入口に自然と活動への関わりが深まっていく流れができていること、周囲への働きかけが丁寧であることなど、自分たちでは気づきにくかった強みをフィードバックしていただきました。こうした気づきは、今後の活動づくりや連携を考えるうえで大きな財産になっています。

Q：コーディネーターの方と、今後どのような取組を進めてみたいですか？

今後は、地域の事業者や学校関係者など、多様な主体とお互いの強みを活かせる関係づくりを進めていきたいと考えています。そのために、日頃からのコミュニケーションを大切にしながら、既存のつながりを新たな展開へと広げていくことを意識し、幅広い関わりときめ細かな連携の両立を目指します。あわせて、関わってくださる方々がそれぞれの場で橋渡し役を担っていただけたような仕組みづくりや、活動の担い手の育成、安定的な運営基盤の確保にも取り組んでいきたいです。

長久手市の紹介

本市子ども政策課は、子ども部全般に関わる調査・企画・調整および施策の推進を担い、子ども・子育て支援施策を総合的に調整・推進しています。子ども・子育て支援事業計画の策定をはじめ、長久手市子どもの権利条例の制定に向けた取組を進めるなど、子どもと子育て家庭を支える環境づくりに取り組んでいます。

取組事例① よってたかってみんなで子育てする講座 + 振り返り会

大学生

地元企業

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

臨床心理士 武田信子氏をお招きし、日常生活の延長で子育てを身近に感じてもらうことを目的に、あえて「子育て」を前面に出さないテーマ設定で、グループワークを取り入れた対面講座を実施した。チラシやSNSを活用して幅広い層に周知するとともに、昨年度の活動でつながった地域の人々にも声をかけることで、多様な立場の参加者が集い、子育てを地域全体で支える意識づくりにつなげた。



●活動の成果

- ・大学生、子ども政策課以外の行政職員、市議会議員、現役保護者、保育士、市内事業者など年齢・性別を問わず多職種が一堂に会し、考える時間を持つことができた。
- ・振り返り会を行うことで今後につながる関係性を構築することができた。



●今後の展開

時間的制約もあり、アクションプランの作成には至っていない。現段階では個人～近い仲間の範囲でこどもの権利尊重を意識し、適切な関わり方を考える段階にある。「こどもまんなか社会」の理念を発信し続け、この範囲を広げていくことが必要である。

取組事例② まちのみんなのお誕生パーティー

大学生

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

市内の公共施設や民間パブリックスペースを巡回し、月2回（平日・土曜日）開催する誕生日会を実施した。0～2歳児を主な対象としつつ、年齢を問わずその場に居合わせた人が「お祝い隊」として参加できる形とし、絵本の読み聞かせや歌、フォトブースの設置、プレゼントの手渡しなどを通じて、誰もが気軽に誕生日を祝える場をつくった。

カード作成や演奏、撮影補助、拍手など多様な関わり方を用意するとともに、市内を巡回して定期開催することで、移動手段の有無に関わらず参加しやすい形式とした。



●活動の成果

- ・誕生日会に対象者として参加した人が、次回以降は「お祝い隊」として関わる姿が見られるなど、参加者の立場が循環する広がりが生まれた。
- ・立ち会った公共施設のスタッフや行政職員からは、同様の取組を自施設・自地域でも実施したいという声が上がリ、活動の趣旨が周囲に波及する動きが見られた。

●今後の展開

マニュアルを作成し、公共施設や民間のパブリックスペース等に提供し、それぞれのスタッフに実施してもらうことで活動を広めたい。また、こどもに企画段階から参加してもらい、お誕生日会の内容をさらにブラッシュアップしていきたい。



地域コーディネーターの声

Q：「よってたかってみんなで子育てする講座」を実施しようと思った経緯はありますか？

「言葉をまだ話せない赤ちゃんといかに対話するか」をテーマに据え、こどもの権利と尊厳を守るにはどうすればよいか、みんなで真剣に考えたいと思い企画しました。赤ちゃん、親、医師、教師、子育てがひと段落した方、子育てに関わったことがない方、20代の学生といった様々な立場の方がこども・子育てについて語り合う場となりました。



（左から）
市内個人事業主
市内でコンビニ経営
公共施設スタッフ

Q：「まちのみんなのお誕生パーティー」について、初めて来られた地域住民の方も参加しやすいようにどんな工夫をされていましたか？

地域の方が普段から立ち寄り場所で開催する、さまざまな関わり方を用意する、通りかかった人をお誘いするといった工夫をしました。心を込めてお誕生日カードを作ってくださったり、コーディネーターからの声掛けに照れながらも加わってくれたり、自分にできることならと快く活動に加わってくれる方が多くありました。親子の満面の笑顔をみて、「こんなに喜んでもらえて私も嬉しい」「また声をかけてほしい」「自分たちでも開催したい」と話してくださる方もありました。

委員からのコメント

「よってたかって」「まちのみんなの」「まぎって」と、取り組まれた企画のタイトルが秀逸でした。企画のタイトルは非常に重要なもので、「はじめの100か月の育ちビジョン」の理念をそのまま体現するように、関わる人々の思いを一つに束ねる力がありました。育児相談や赤ちゃんのお世話体験など、イベント会場は「ふらっと参加できて、ふらっと去れる」気軽さを大切に開かれた空間となっており、参加のハードルを低くすることで、普段はこうした場に足を運びにくい人や、異なる世代の人々にとっても立ち寄りやすい環境となっていました。郵便局とのコラボ、区役所と中学生と大学生のコラボ、子から親へのマッサージ、それぞれの持つ技術や得意分野を活かした取り組みが、会場にやさしい温もりを生み出していました。限られたスペースであっても、熱意と工夫によってあたたかな場所になると気づかされる参考になりたい取り組みでした。



玉川大学 教育学部
乳幼児発達学科 講師
上田 よう子

取組事例③ まどって長久手フェス & 子育てサロン冬まつり

大学生

地元企業

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

市内商業施設内ホールおよび隣接する公共施設を会場とし、予約不要・入退室自由の参加型イベントとこども食堂を組み合わせた取組を実施した。乳幼児から小学生とその保護者を対象に、学生から高齢者まで幅広い世代や行政・郵便局・助産師・子育て支援団体など多様な主体が、それぞれの得意分野を生かして出展した。

●活動の成果

- ・出展者・ボランティア35人、のべ508人が参加し、0歳から80歳代までの幅広い世代が集い、世代を超えた交流が生まれた。
- ・郵便局をはじめとする地域の身近な機関と連携したことで、子育て支援の取組が日常生活圏に自然に広がるきっかけとなった。

●今後の展開

本事業をきっかけに関わりをもつことができた企業や団体との連携強化を図るとともに、新たな連携先の発掘をしていきたい。



「はじめの100か月」のこども

- ・(工作が)難しいところもあったけど、おじいさんが教えてくれた(4歳児)
- ・赤ちゃんのお世話を初めてやって、おむつと着替えができた。おんぶしたら重かった(6年生)
- ・ハガキを書いてみたかったので、郵便局の人に教えてもらえてよかった。おばあちゃんに送る年賀状をかわいく書けた(3年生)

活動に参加した方の様子

保護者

- ・こんなにたくさんの地域の方が、こどもたちのために楽しいイベントをやってくれて嬉しい。応援してくれる人がいると思えた
- ・県外から引っ越してきて知り合いがいなかったが、同じ世代の親子と出会うことができた
- ・「こどもの意見を尊重できていると思うか」、というアンケートにハッとした

出展者（高齢者世代、企業の方）

- ・こんなに多くのこどもたちが来てくれると思わなかった。コーディネーターさんにお誘いいただいて出展したが、参加できてよかった
- ・こどもが真剣な表情で作業していた。次は後ろで見守る保護者の方にも参加してもらえる企画を考えたい

大学生・ボランティア

- ・自分たちで作ったカードゲームをこどもたちが楽しんでくれて嬉しかった
- ・こどもに説明する時の話し方を工夫してみた
- ・こどもの頃に参加できたら、きっととても楽しかったと思う
- ・他の出展者さんとも出会うことができた。機会があればまた参加したい

地域コーディネーターの声



(左から)
市内個人事業主
市内でコンビニ経営
公共施設スタッフ

Q：地域コーディネーターとして、どのような強みを生かして活動を実施されましたか？

普段からお付き合いのある方々にビジョンを説明し、一緒にチャレンジしてもらえないかとお願いしました。仕事の取引先で地域貢献に意欲のある郵便局員さんにお声掛けしたところ、ぜひ参加したいと快諾してくださいました。初めての活動なので不安や心配があると思い、出展内容の企画・準備・当日の呼び込み等できる限りサポートしました。こどもたちに喜んでもらうことができ、出展者の方も大きな成果を得られたようです。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

子育てを応援したい、地域貢献をしたい企業・団体はまだ複数あると思いますが、単独での実施は負担が大きい、集客が難しいといった課題があるようです。今回はイベントのブース出展という形式と十分なサポートによって、これらの課題を取り除くことができました。参加しやすい方法・手段を検討し企画を持ち込むことで、企業・団体を「地域で子育て」に巻き込んでいきたいと思います。

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① イベント会場において、**自然と目にしたり耳にできるような環境づくり。**
- ② 様々な集まりのイベントを通して、**多世代が楽しみながら学べる仕組みづくり。**
- ③ 安全に配慮しながら、**それぞれの団体が自らの持ち味を生かし、無理なくできることが必要。**

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・「はじめの100か月の育ちビジョン」の認知が関係団体や関係者周辺にとどまっており、「**地域で子育てする**」という考え方が**市民一人ひとりの実感として十分に浸透していない。**
- ・人材や子育て世帯の流動性が高い地域特性から、継続的な働きかけを行わなければ文化として定着しにくく、「子育てしやすいまち」というイメージが先行し、**環境改善の取組が後回しになりやすい状況が見られる。**

今後の活動の展望

- ・広く浅く繋がりや活動を広げる部分と、狭く深く繋がりや活動を追求する部分を両立させる。
- ・連携した人が地域コーディネーター的役割を担えるような仕掛けの検討・実行する。

学校法人仙台こひつじ学園（宮城県仙台市）

認定こども園

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- 本園は地域における幼児教育の拠点として、多世代・多主体が日常的に交流し、こどもの育ちを社会全体で支える環境づくりに取り組んできた。地域住民や保護者、学生、高齢者、障がいのある人などが保育現場で個性や得意分野を活かして関わる「コミちゃん（コミュニティチャー）制度」を運営し、こどもたちが多様な人との関わりを通じて社会を学ぶ場を築いてきた。
- こうした基盤を発展させ、「こどもを真ん中にしたつながりと役割の連鎖」を地域内に広げ、持続可能な共生社会のモデルを構築するため、本事業に申請した。

活動地域の概況・課題

○活動地域：宮城県仙台市

- 面積 786.35km²、人口 1,093,055人（R8.2.28時点）
- 宮城県の県庁所在地で、東北地方最大の都市である。
- 東北大学をはじめとする大学・研究機関が多く、学術都市の側面もある。

○地域の課題

- 核家族化により子育て世帯が孤立し、地域交流の希薄化で世代間のつながりや助け合いが減少している。

この事業を通して目指したい姿

本学園を地域のハブとして多世代が協働し、こどもの育ちを支える社会の厚みを増すことを目指している。核家族化による孤立や地域交流の希薄化という課題に対し、これまで乳幼児と接点が少なかった高齢者、学生、企業、福祉施設などをつなぎ、**誰もが「こどもの育ちの当事者」となる共生社会の実現を図る。**これらの活動を通じて、若者には自己肯定感を、高齢者には役割を創出し、**地域全体でウェルビーイングを向上させる「こどもまんなか社会」を構築することが理想の姿である。**

地域コーディネーターの構成・役割

向山こども園 副園長：企画・調整および各事業の総合進行管理を担い、園内外の関係者をつなぐハブ役として事業全体を統括する。
向山こども園職員：保護者対応や外部連携、地域との食を通じた繋がりを構築する。
外部関係者：地域福祉との連携強化や障がい者と地域住民の繋がりを構築する。

活動の運営体制

事業全体を統括する副園長を中心に、食育企画を担う「管理栄養士」、園内調整を行う学年主任といった内部人材に加え、地域連携を支援するNPO法人代表、障がい者福祉施設の代表など、多様な外部人材によって、それぞれの専門性や人脈を活かし、チーム体制で「社会の厚み」を増す活動を推進した。

地域コーディネーターのメンバー構成

- こども園 副園長 1名
- こども園 スタッフ 2名
- 法人代表者等 2名

どのように本来業務と両立を図っているか

LINE WORKSを活用して関係者間の情報共有を迅速化するとともに、役割分担を明確化した。さらに会議のテーマ整理により会議時間の短縮を図り、複数の事業を同時進行で推進できる体制を整えた。

地域コーディネーター事業に取り組んでみて感じたこと

従来の活動に比べ、**本園を拠点に多世代・多様な背景を持つ人々が自然につながる場を設計できるようになった。**また、参加者の年齢や経験に応じた役割分担を行うことで、無理なく活躍できる環境が整い、**園児には年上への憧れや安心感が生まれ、若者には頼られる経験を通じた自信や次世代育成への意識**が育った。また普段関わらないこどもたちと関わったことで、「楽しかった」「かわいかった」という声を頂けたことにやりがいを感じた。**障がいのある方との直接交流や高校生の主体的な企画運営など、地域住民との新たな接点が広がり、既存行事に組み込む導線設計が交流の拡大に直結**することを確認できた。

団体職員の方の声

Q：園と地域のつながりを生み出すことについて、どのような思いや考え方を大切にしていますか？

こどもを中心に多様な世代が交流し、ゆるやかなつながりを育むことを大切にしています。園が地域に開かれた場となり、皆でこどもの育ちを支え合う関係性を築きたいです。

Q：認定こども園が地域コーディネーター事業に取り組むことには、どのような意義があると感じますか？

園が地域資源をつなぐハブとなり、多世代交流の拠点となることに意義を感じています。活動を通じ、丁寧な対話や既存行事の活用が、高齢者や学生、企業の参加の心理的ハードルを下げると気づきました。今後も地域全体でこどもの育ちを支え合う環境づくりを広げていきたいです。

Q：今後、さらに挑戦してみたいことはありますか？

半年間の活動を通して、既存の地域行事に福祉施設や学生など多様な主体が関われる形をつくることで、自然な交流が生まれる可能性を実感しました。今後は、こうした単発の交流を継続的な関係へと発展させる仕組みづくりに挑戦していきたいです。例えば、地域行事への参加だけでなく、園の日常活動や他事業とも連携しながら、多世代や多様な立場の人が関われる機会を増やし、地域の中でこどもを中心としたつながりが広がる環境づくりを進めていきたいです。



管理栄養士
齊藤 友恵

学校法人仙台こひつじ学園 向山こども園の紹介

1956年に幼稚園として創立し、2025年度で69年目を迎えた。長年にわたり地域とともに歩みながら、時代やこども・家庭の変化に応じて教育・保育のあり方を更新してきた。現在は、幼稚園から移行した幼保連携型の認定こども園として、乳幼児期の育ちを遊びを中心に支える実践を行っている。地域に開かれた園づくりを大切に、多世代・多様な人との関わりを通して、こどもを真ん中にしたあたたかなコミュニティの形成を目指している。



取組事例① 高校生の地域チャレンジ

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

高校の探究学習と連携し、生徒が地域の親子向けイベントの企画・運営を担当した。地域行事として開催した「キリストこども市」では、本取組の一環として高校生バンドによるライブパフォーマンスを行った。

企画にあたっては、高校生の主体性を尊重しつつ、こどもが楽しめる内容を重視し、親しみやすい楽曲選定や当日の柔軟な構成調整を行った

●活動の成果

- ・高校生が地域の担い手として認知される機会となった。
- ・探究学習におけるフィールドワークを通じて、生徒がこどもと主体的に関わり、こどもを身近な存在として捉え、純粋に「かわいい」と感じるなど、こどもへの理解や関心を深めることに繋がった。

●今後の展開

音楽以外の分野でも高校生が地域チャレンジに参加できる機会を増やし、多様な関わり方を検討していく予定である。



取組事例② あそびの先輩たち

小中高生

大学生

●取組内容

「キリストこども市」において中学生・高校生・大学生が運営ボランティアとして参加したほか、近隣中学校の家庭科の授業と連携し、中学3年生が園児と共に遊ぶ授業プログラムを実施した。

活動にあたっては、参加者の年齢や経験に応じた役割分担を行い、小学生は園庭での遊び相手、中高生以上はワークショップの補助や行事運営のサポートなど、発達段階に応じて無理なく関われる活動内容を設計した。

●活動の成果

- ・園児には年上の先輩への憧れや安心感が生まれ、遊びの幅が広がる成果が見られた。
- ・参加した小学生から大学生の若者においては、こどもや地域から頼られる経験を通じて自信や自己肯定感が高まり、かつて遊んだ場所で「支える側」として関わる意識や、次世代育成への関心を育む機会となった。

●今後の展開

参加する小学生や中学生以上の役割をより明確にし、継続的に関われる仕組みづくりを進めていく予定である。



地域コーディネーターの声

Q：園児と関わる中で、小中学生や高校生に、どのような成長や変化が見られましたか？

小中高生は「プレイリーダー」等として園児と関わる中で、自分の経験や特技を活かして人と接する体験を積みました。この経験は「自分の存在が誰かの役に立つ」という実感をもたらし、自己肯定感やリーダーシップの向上につながっています。また、地域行事で主体的に役割を担って表現することで大きな達成感を得るとともに、地域とのつながりや社会参加への意識が高まるという成長が見られました。

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気付きがありましたか？

地域行事の中に多様な人が自然に関われる機会を設けることで、こどもを中心に世代や立場を越えた交流が生まれることを実感しました。また、関係づくりには小さな関わりを継続して積み重ねていくことが重要だと気付きました。



事業運営委員 統括
安立 奈央

委員からのコメント

本法人では、乳幼児期のこどもが毎日を過ごす保育施設ならではの特性を生かし、その「こどもたちの暮らし」を中心に据えて、地域の様々な世代や立場の人たちが出会い、繋がり、関わり合える機会や関係を構築していくための取り組みを企画・実施されている点が印象的です。実際に参加させていただいた「キリストこども市」では、地域の障がい者福祉施設や企業、中・高校生や保護者の方々が、それぞれの「できること」や「強み」を活かしながら交流し、こどもと大人がともに楽しめる場が生まれていました。元々あった園の行事を活用し、それを軸として、園外の地域の多様な団体や人材と協働・連携していくことは、相互にとってのハードルも低く、取り組みやすさがあるため、関わりを創出するきっかけになりやすいと同時に、そこで生まれた関係が、「次の一步」に繋がっていく土台にもなっていくと思われます。



聖心女子大学
現代教養学部 教育学科
高嶋 景子 教授

取組事例③ つながるマルシェ

小中高生

大学生

地元企業

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

「キリストこども市」において、障がい者福祉施設と連携した「つながるマルシェ」を実施した。本取組では、地域の放課後等デイサービス「リンク」および就労継続支援B型事業所「ハナハナ」と協力し、園庭やホールにおいて手作り製品の販売や活動紹介を行った。実施にあたっては、福祉イベントとして単独で開催するのではなく、多くの地域住民が来場する既存の大型行事の中にブースを設け、来場者が自然に立ち寄れるような導線を工夫した。

●活動の成果

- ・園をハブとして多様な背景を持つ人々が自然につながる関係性が育まれるなど、地域における「社会の厚み」を実感することに繋がった。

●今後の展開

単発のイベントにとどまらず、継続的に福祉施設と関われる仕組みづくりを検討し、園の日常や他事業との連携につなげていく予定である。



活動に参加した方の様子

「はじめの100か月」のこども

保護者

- ・福祉施設の方と一緒に制作を楽しみ、完成した作品を嬉しそうに保護者に見せる姿が見られた
- ・小さなこどもでも参加できる制作活動を、親子で一緒に楽しむ様子が見られた

- ・こどもが地域の方と自然に関われる機会になり、とても良い経験になりました
- ・親子で安心して参加でき、地域とのつながりを感じられる時間でした

高齢者世代

大学生

- ・小さなこどもたちと関わることで、とても元気をもらいました
- ・地域のこどもや保護者と交流でき、楽しい時間を過ごすことができました

- ・こどもや地域の方と関わることで、地域のつながりの大切さを実感しました
- ・普段の学生生活では得られない、貴重な交流の機会になりました

地域コーディネーターの声



障がい者福祉事業を行う
ユツケル合同会社代表
佐藤仕展

Q：活動に取り組む中で苦労したことや、課題を乗り越えられたことがあれば教えてください。

地域の既存行事の中で福祉施設と連携するにあたり、来場者が福祉ブースに足を運びにくいのではないかという懸念がありました。そこで単独イベントではなく、大型行事の中に自然に立ち寄れる配置や導線を工夫しました。その結果、こどもから高齢者まで多様な人が関わる交流が生まれました。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

マルシェでは福祉施設や企業のボランティアに参加いただき、多様な大人がこどもと関わる温かい空間が生まれました。この成果を単発で終わらせず、今後は園の日常活動にも企業や施設を巻き込み、地域全体でこどもを育む持続可能な関係へと発展させたいです。

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① 既存行事の活用による心理的ハードルの低下 ...集客の多い既存の行事に取組を組み込み、参加への心理的ハードルを下げ「まず来てもらう」機会を作る。
- ② 個別の不安に寄り添う丁寧な事前のヒアリング ...事前のヒアリングで個別の事情や不安に丁寧に寄り添い、段階的な参加や負担の少ない関わり方を提案する。
- ③ 無理のない役割設定と園による伴走サポート ...参加者の年齢や経験に応じた無理のない役割を設定し、園が伴走してサポートすることで安心感を提供する。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・新規企画をゼロから立ち上げる形では、内容や責任の所在が見えにくく、地域住民や企業にとって参加のハードルが高いため集客につながりにくい。
- ・学校や団体を通じた参加は信頼性が高い一方で、条件整理や事前設計が不足すると運営負担や混乱が生じやすい。

今後の活動の展望

- ・こども園という既存の枠組みを再設計し、地域住民・学生・企業が自然に関われる仕組みを構築することで、集客負担を減らし継続性を高める。
- ・既存団体（学校、社会福祉協議会等）との連携を軸に、企画の趣旨・役割・参加の流れ・安全管理などを可視化し、団体が安心して参加できる条件を整える。

学校法人柿沼学園（埼玉県久喜市）

認定こども園

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- ・「はじめの100か月の育ちビジョン」の認知拡大や、策定後の具体的な取組の推進は、これまで柿沼学園が取り組んできた事業にとっても不可欠である。
- ・また、これまでの事業実施を通じて、さまざまな課題を抱える家庭やこどもの生育状況に触れる中で、『家庭や施設だけでなく、地域全体で子育てを行い、「社会の子」として子どもたちを育てていく必要がある』という考え方と本事業の理念が深く重なることを強く感じた。こうした背景から、本事業の取り組みに貢献できると考え、本事業に申請した。

この事業を通して目指したい姿

古くからの住民が暮らす地域では高齢者の割合が高く、一方で徐々に新しい街並みが形成され、そこには若者世代が集まっている。こうした状況の中、高齢者・子育て世代・単身世帯の間には分断が生じやすく、各世代が交流できる場はほとんど存在しない。**この世代間の分断と地域の活力低下という課題を解消するため、地域の方々が自然につながれるコミュニティを創出し、参加者一人ひとりが自身の強みを生かしながら子育て世代に関わる機会を増やすことを目指す。**

地域コーディネーターの構成・役割

本年度の地域コーディネーターは、当法人職員に加え、子育て支援団体や自治会など外部の多様な団体に所属する方々で構成した。子育て案内所の運営等で地域資源と家庭をつなぐ役割を担う「地域みらい部」が活動のハブ機能となり、事業統括者である当法人のもと、コーディネーターと共に活動を推進した。

どのように本来業務と両立を図っているか

法人内の通常業務をしながら地域住民や地域資源とのつながりを深めることは、地域みらい部の事業にとっても重要で意味があり、地域の人たちへ向けた活動に取り組むことが事業の強みになっていくものであった。ビジョンの普及啓発活動を本事業と両立することで、「地域全体で子育てをしていくこと」「地域の子どもたちは地域が見守って手を差し伸べよう」といった大きな一歩へつながった。

活動の運営体制

当法人を本事業の事務局とし、全体の統括および進行管理を担った。また、本年度事業には昨年度事業の地域コーディネーターも引き続き参画し、これまでに培った経験や地域との関わりを活かして活動の継続性・安定性の確保や事業の円滑な進行に寄与した。

地域コーディネーターのメンバー構成

- | | |
|----------------|----|
| ● 当法人職員 | 1名 |
| ● こども園職員 | 1名 |
| ● 産前産後ケア施設 職員 | 1名 |
| ● 助産師 | 1名 |
| ● 自治会長・おやじの会代表 | 2名 |
| ● 大学非常勤講師 | 1名 |

地域コーディネーター事業に取り組んでみて感じたこと

本事業を通じて、地域の方々と地域コーディネーターが子育てに関する活動を通して繋がりを持つことは、**地域の活性化と住民の孤立防止において極めて重要**であることを改めて認識した。また、100か月を過ぎた世代が、支える側として地域のボランティア活動に参画することは、地域コミュニティの持続的な支援体制の構築に不可欠であると理解した。これらの取り組みは、**世代間のつながりを深め、地域全体で子育てを支える文化を根付かせるうえで欠かせないものであると考えている。**

団体職員の方の声

Q：園と地域のつながりを生み出すことについて、どのような思いや考え方を大切にしていますか？

地域とつながりを持つことで、子ども達にとってたくさんのコミュニティが生まれ、心身ともに大きな成長となっています。社会全体で子どもたちの成長を見守る地域となっていき、子育て世帯が、いろいろな世代と関わりながら安心感を感じていて、あたたかな関係性を築いていけたらということを大切にしています。

Q：これまでの活動実績を活かしつつも、今回の事業で特に力を入れたことや新たな気付きはありますか？

学童期から高齢者までの世代と乳幼児のいる子育て世帯をつなげることが今年度の目標でした。赤ちゃんがいろいろな世代と触れ合う経験が出来たことや、ママが束の間の休息やリフレッシュが出来た事、児童、生徒は赤ちゃんの存在の愛おしさに気付けたこと、高齢者の生活に彩りが出来た事は大きな一歩となりました。

Q：幼児教育・保育施設を拠点として地域コーディネーター事業に取り組むことには、どのような意義があると感じますか？

はじめの100か月の大切な時期のお子さんを預かる保育施設として、子育てを応援サポートできる強みがあると思います。その時期での支えられる側の経験が、自分が支える側になった時、「次は自分が！」と、地域の活動に参加してくれるのではないかと、という期待があります。地域コーディネーターとして、支えられる側と支える側の輪が自然に続いていける地域社会になっていけたらいいなと思っています。



当法人職員

学校法人柿沼学園の紹介

昭和50年4月に栗橋さくら幼稚園をスタートさせてから幼保連携型認定こども園2園、小規模保育園2園、企業主導型保育園1園、学童クラブ1施設、地域子育て支援拠点事業、森の図書館、家庭訪問型子育て支援、産前産後ケア施設、児童育成支援拠点事業、子育て世帯訪問事業、学習支援、駄菓子屋、フードパントリー、こども食堂、子育て案内所（利用者支援事業）などの事業を展開し、産前から18歳まで切れ目のない子育て支援を行っている。

学校法人柿沼学園
認定こども園

こどもむら

取組事例① おさがりひろば/みんな食堂

小中高生

大学生

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

子育て中の家庭と地域住民がおさがり交換会に参加し、交流できる活動。子育て中の母親や子育ての先輩ママをはじめ、小中学生・高校生・大学生のボランティアが参加した。併設スペースでは「みんな食堂」を実施し、温かい豚汁を提供することで、地域の高齢者やおさがりひろばを利用した家族が共に食事をする機会をつくれた。また、絵本コーナーを設け、学生ボランティアによる読み聞かせを行うなど、世代を超えた交流が生まれる構成とした。



●活動の成果

- ・子育て中の家庭を中心に地域住民や学生ボランティアが集い、世代間交流の輪が広がった。
- ・子育ての先輩ママと交流することによって子育てに係る相談相手が見つかり精神的な余裕に繋がっている。

●今後の展開

社会福祉協議会等の関係機関を増やすためにも、準備期間を増やし、計画性を上げることが重要だと考えており、今後の実践に向けて検討を進める。



取組事例② 赤ちゃんとおぼろ〜ママのリフレッシュのお手伝い〜

小中高生

その他
地域住民

●取組内容

乳児とそのママ、妊婦と高校生が関わる場を設け、保護者がリフレッシュできる時間を設けた。高校生たちが乳児の面倒を見ることで、その時期の発達や妊婦の様子が分かり、子育てに対する肯定的なイメージを持って成長できることを目的とした。保護者も高校生と触れ合うことで、自分のこどもの将来がわかり、楽しみが実感できた。



●活動の成果

- ・高校生たちは、乳児期のこどもたちと関わりを持ち、実際にミルクを上げることなどを経験し、ママと乳児の関係性やこどもの発達などを身近に感じる事が出来た。
- ・乳児期のこどもの保護者たちが、同じ地域の高校生たちと関わりを持つことで、「顔見知り」が増えたことや、高校生の成長を近くで見て感じる事ができた。

●今後の展開

知識だけでなく本当の赤ちゃんとおふれあいたい高校生のニーズや、安心して一息つける時間が欲しいなどといった保護者のニーズを踏まえ、乳児とその保護者に対して「はじめての100か月の育ちビジョン」を軸に活動の意義や双方のメリットを説明し安心して参加してもらう。



地域コーディネーターの声

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

学齢期から高齢者までの支える側が活躍する場の提供や、乳幼児を含む子育て世帯が安心して地域の集まりに参加できる環境を作り、みんなで子育てをする街づくりになるよう貢献したいです。

Q：園児と関わる中で、小学生や高校生にどんな変化や成長が見られましたか？

はじめは、赤ちゃんが戸惑う場面があったので、おもちゃを出し、少しずつ仲良くなれるよう「ビクビク」しながらでした。段々と慣れていくと、赤ちゃんの笑みがこぼれ、高校生みんなが「かわいい！」という思いが出てきたように思いました。抱っこをしたり本を見せてあげたり、高校生の顔が生き生きと輝いていました。「今後もこんな機会があったら参加してみたい」「かわかった」と赤ちゃんが身近な存在になっていたと感じました。



産前産後ケア施設職員

委員からのコメント

子育て支援において先駆的な取り組みを重ねてこられた知識と実績を基盤として、法人職員の方々の強みや施設機能を最大限に活用し、自治会とのつながり・連携を効果的に展開している点は、極めて優れた実践であると感じました。特に産前産後ケア施設において、日頃は乳児親子と接する機会の少ない小学生との交流を企画した取り組みは、独創的で意外とこれまでにない新規性の高いものでした。この事例は、自治体、学校、区役所、地域団体等が連携することで、他地域でも有意義な交流が生まれる可能性があるのではないかと感じました。また、こども食堂を利用していた学生への積極的な声かけを通じて、これまで子育て支援の場に参加する機会が限られていた小学生から大学生までの幅広い年代を巻き込み、意欲的にイベントを企画・工夫された点は、他の団体にとっても参考となる実践でした。

玉川大学 教育学部
乳幼児発達学科 講師
上田よう子

取組事例③ お兄さんお姉さん保育士

小中高生

その他
地域住民

●取組内容

学童に通っている小学3～5年生の児童が1日園で過ごし、乳幼児と共に生活する交流活動を実施した。昼食を含めた日常生活や、午睡時間中の保育士への質問、制作活動等を通して乳幼児への理解を深めるとともに、事前学習を踏まえた関わりにより「はじめの100か月の育ちビジョン」を具体的にイメージする機会とした。

●活動の成果

- ・学童期のこども達は、乳幼児期のこどもたちと関わりを持つことで、乳幼児期のこどもたちへの理解が深まり、乳幼児を身近に感じる事ができた。
- ・乳幼児期のこどもたちが、同じ地域の学童期のこどもたちと関わりを持つことで、「顔見知り」が少し増えた。

●今後の展開

こどもたちの成長や価値観の形成にとっても良い効果があったと感じたので、学童以外で生活しているこどもたちや、自宅保育で生活している乳幼児にも、同じような体験が提供できたらいいと感じた。



「はじめの100か月」のこども

- ・学童期のこどもたちと関わった乳幼児は、いつも関わる保育士にはない目線で関わるお兄さんお姉さんの存在がうれしく、遊びも盛り上がっていた
- ・いつも過ごしている保育室に学童期のこどもたちが関わることで、保護者の方たちも安心して預けられたようだった

学童期のこども

- ・自分もこんな時代があったこと、大切に育ててくれたことを思いだした
- ・自分もお母さんになりたい。・もっとお話をしたい・鬼ごっこ遊びは大変
- ・先生の仕事は大変だけど大切な仕事だと思った

活動に参加した方の様子

- ・学童期の保護者の多くは「先生体験ができるのか？」と心配な様子で、自分のこどもたちが反抗期に差し掛かっている中で果たして対応が出来るか不安な様子だったが、力加減や言葉遣いも調節して乳児と関わる事が出来たエピソードを話すと、家から一歩出るときちゃんと対応できることが分かり安心し、我が子の成長を喜んでた

保護者

大学生

- ・おさがり広場では声掛けに苦戦した。子供服のサイズと年齢が難しかった絵本コーナーで乳幼児と触れ合うことで次第に仲良くなれた・みんな食堂では様々な世代の交流の場所として食事をする事が出来た
- ・赤ちゃんが安心する抱っこの仕方を覚えることが出来た

地域コーディネーターの声



こども未来農園職員
自治会長

Q：地域の高齢者や小学生、高校生には、どのように活動に参加してもらったのでしょうか？

自治会の回覧板を利用して、地域の高齢者や現役世代に周知を行いました。小学生以下については関連団体のグループラインで周知しました。自治会会員以外の周知については、子育て世帯には子育て案内所や子育て支援センターにチラシを掲示してもらいました。小学生、高校生たちには、駄菓子屋を利用の際も声を掛けました。小学生は友だちから友だちに呼び掛けてもらいました。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように活かしていきたいですか？

地域の人とできたつながりを活かして、乳幼児とその家族がこの地域で安心して暮らせることが出来るよう、多世代の交流が出来るイベントを企画し、地域みんなでこどもまんなか社会を目指し、つながり、支えあえる地域にしていきたいです。

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① **小学生のうちから乳幼児とふれあい体験活動に参加してもらう / 高齢者世代に子育て応援隊になってもらう。**
様々な世代の地域住民には**みんな食堂、おさがり会などを通して子育て世帯と関わるきっかけ**を作っていく。
- ② **活動を地域に根付かせ、継続させるために**大きなイベントではなく、子育て中のママが楽しく子育てできるお手伝いができる**小規模イベントを年に数回実施する。**
- ③ 若者世代に「はじめの100か月」の大切を伝え、こどもを産み育てることへの肯定的考えを持ってもらえるよう、**学童期から子育て世代と関われるイベントに参加**してもらう。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・「はじめの100か月の育ちビジョン」における「**支える側**」へと移行する**若者世代に対する広報**が十分に届いておらず、チラシ配布や回覧板といった従来の手法だけでは参加者の確保が難しい点が課題である。
- ・**子育て世代は先輩世代に相談・協力を得ることで子育てへの余裕が生まれ、高齢者世代は乳幼児と接する機会の増加により生活に活気や彩りがもたらされた。若者世代は地域イベントへの参加を通じて多世代交流が進み、結果として、全世代がこどもの成長を地域全体で喜び合える社会づくり**につながった。

今後の活動の展望

- ・地域の人々が集まる場において世代間の分断を生じさせず、互いに関わり合える関係づくりを重視する。
- ・地域資源とのつながりを深め、既存の活動を工夫しながら長期的に継続できる形へと発展させる。

株式会社ネクストビート（埼玉県所沢市）

子育て支援団体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- ・当法人は、保育業界に深く関わってきた中で、こどもや保護者を取り巻く地域社会の課題を直接感じてきた。共働き世帯の増加、核家族化、少子化等の社会的背景により、子育て環境は大きく変化し、育児と仕事の両立が現代の大きな課題となっている。こうした状況の中、保護者の多様なニーズに応え、継続的かつ充実した支援を提供するためには、地域資源をつなぎ、世代を超えて支え合う仕組みが不可欠である。
- ・当法人は、地域の特色を活かしながら、乳幼児やその保護者と関わりの少なかった人や場所をつなぐことができる地域コーディネーター人材を養成し、先進的な取組事例を創出することが、地域の子育て環境と社会の厚みを増すために必要であると考え本事業に申請した。

活動地域の概況・課題

○活動地域：埼玉県所沢市

- ・面積 72.11km²、人口 342,473人（R8.2.28時点）
- ・埼玉県南西部のベッドタウンである。
- ・トトロの森があるなど都心に近い自然が豊かな住宅都市となっている。

○地域の課題

- ・都市化や共働き世帯の増加に伴い、地域住民との接点が希薄化している。
- ・孤立した子育ての増加
- ・世代を超えた交流やつながりの機会の不足

この事業を通して目指したい姿

専門的知見を活かした「あそび」を媒介に、**親子が地域社会に自然に溶け込める社会**を目指している。特に、**保育の未来を担う学生たちが、実習の枠を超えて地域社会の一員となり**、親子や地域住民との関係性においてリーダーシップを発揮できる環境を重視している。**学生が主体的に地域をつなぐ担い手となり、その経験を継承するサステナブルな仕組み**を構築することで、地域全体でこどもの育ちを温かく見守る、厚みのある社会の実現を追求する。

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

秋草学園短期大学の地域保育学科は、保育現場で求められる保護者支援や地域の子育て支援について深く学び、児童館実習などを通じて幅広い年代の人々との関わりを経験している。地域保育学科の学生は、地域に根差した保育を目指す保育者の卵であることや、授業外でも地域のイベントやボランティア活動に積極的に参加する意欲の高い学生も多いことから本事業の対象に選定した。

募集方法

当法人と連携している秋草学園短期大学地域保育学科の秋山教授や、本学科で授業を実施している一般社団法人あそび庁小山氏および当法人より、学生に向けて本事業の概要や目的を説明した上で、有志で参加者を募集した。



活動の運営体制・工夫

地域コーディネーター事業の運営体制

当法人の企画チーム、秋草学園短期大学地域保育学科の学生、一般社団法人あそび庁の3者が連携し、所沢市の協力のもと事業を推進している。

地域コーディネーター同士での連携を図るための工夫

- ・学生との連携については、学生との接点が限られていることから苦慮した部分があったが、本事業専用のライングループを作成し運用したことで円滑な連携を実現した。
- ・学生と良い関係を構築するために、授業などを通じて、対面でコミュニケーションが取れる機会を創出した。

地域コーディネーターのメンバー構成

- 秋草学園短期大学地域保育学科 2年生、3年生、卒業生など 30名程度
- 秋草学園短期大学地域保育学科教授
- 一般社団法人あそび庁代表理事
- 一般社団法人あそび庁職員 13名
- 株式会社ネクストビート社員 2名

各コーディネーターの活動を通じて感じていること

団体職員の方の声

Q：秋草短期大学やあそび庁との連携はどのようにして実現したのでしょうか？

知人の紹介であそび庁代表と知り合ったことが契機となり、同氏が講師を務める秋草学園との縁にも繋がりました。各者の企画力・知見・教育資源を融合し、学生を地域コーディネーターとする独自の産学連携体制が実現しました。

Q：学生の地域コーディネーターの方々に参画いただくために、工夫された点がありますか？

授業内でビジョンを共有し、当社・あそび庁・教授がフォロー。あそびの内容から学生自身が主体的に考えるプロセスを重視しました。企画の主役を担うことで当事者意識が生まれ、現場での臨機応変な対応力に繋がりました。

Q：学生の地域コーディネーターの方々の活動を見て、どのようなことを感じましたか？

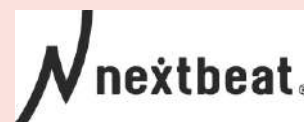
初回のイベントでの経験を活かし、2回目では家庭でできるあそびの共有や、保護者へ「一歩先」の気配りがみられるなど、成長を感じました。保育実習では体験できない親子との自然な交流が、学生の自信にも繋がったようです。



株式会社ネクストビート
保育士バンク！総研所属。
官民連携事業や保育施設
の人事支援事業を担当。
二児の母。

株式会社ネクストビートの紹介

保育・子育て・地方創生領域に強みを持つ社会課題解決型ベンチャー企業である。業界最大級の保育士向け転職支援サービス「保育士バンク！」を運営し、累計48万人以上の保育者と2万以上の保育施設をつなぐプラットフォームの展開や、保育現場や保護者のリアルな声をリサーチし、保育業界の発展に向けてレポート等の情報発信を行っている。



取組事例① 世界あそび万博

小中高生

大学生

地元企業

●取組内容

秋草学園短期大学の学園祭にて、乳幼児とその保護者が学生たちと「あそび」を通じて交流する「はじめの接点づくり」イベントを実施した。モルックやラダーゲッター、カップコロリングといった世界の伝統的な遊びに加え、身近な素材（紙コップなど）を使った創作遊びブースを設置した。多世代が共に楽しみながら、地域の保育資源である大学を知り、繋がるきっかけを提供した。

●活動の成果

「家庭では思いつかない遊び方ができた」との声があり、親がこどもの新しい一面や挑戦意欲を発見する機会となった。保育学生とのあそびの機会について、保護者から「優しかった」「一緒に楽しんでくれて安心した」と評価され、信頼の芽が生まれた。

●今後の展開

地域住民と共に取り組める仕組みづくりを進めるとともに、会場スペースや導線を見直し、来場者数を想定した安全で効率的な運営体制を整備する。また、遊びやルールの事前説明、乳幼児への配慮を強化し、あわせてメンバー間の連携や柔軟な人員配置を図ることで、より多様な参加者が安心して楽しめる取組へと発展させていく。



取組事例② ところざわ こども・こそだて イベント周知

地元企業

その他
地域住民

●取組内容

所沢市の協力により、市の公式SNS等での情報発信や、地域の児童館や子育て関連施設でのチラシ配布・掲示を実施した。近隣の民間保育施設へも一園ずつアプローチを行い、直接保護者へイベント案内を届けてもらうよう依頼した。

イベント会場では、出口付近に「次への繋がり」を作るための専用ブースを設置した。対面でのコミュニケーションに加え、LINEオープンチャットを開設し、参加を促進しており、次回イベントのリマインド等に活用している。

●活動の成果

・ところざわ こども・こそだてイベントへの参加者数は合計81名（こども40名、大人41名）と、目標としていた乳幼児とその保護者を中心に、1〜3歳児の世帯が多数来場した。

●今後の展開

子育て世代に限らず、地域のリタイア世代にも参画してもらえる運営体制を整え、世代を超えて支え合う持続可能な地域活動へと発展させていく。



地域コーディネーターの声

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

孤立しがちな子育て世帯が地域と繋がるには「あそび」というハードルの低い入口が重要な要素となると考えました。未来の保育者である学生の力と「あそび」を掛け合わせ、大学を地域拠点にするという構想に大きな可能性を感じて参画を決めました。

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気付きや成長がありましたか？

あそびを媒介にすることで、初対面の親子や学生が自然に打ち解ける「きっかけ」としての力を再認識しました。学生が、状況に応じてあそびを自ら発展させ、親子に声がけしたり場の安心感をつくり出していく姿に、次世代を担う地域コーディネーターとしての大きな可能性を感じました。



一般社団法人あそび庁
代表理事。「遊びで社会
をアップデートする」を掲げ、
自治体連携やサポーター
養成を通じ、遊びの価値
が最大化される社会の実
現に向け尽力している。

委員からのコメント

IT企業であるネクストビートが秋草学園短期大学という保育養成機関と連携しながら、多くの地域コーディネーターを養成できたことは、これからの地域コーディネーター養成の展開を考える上でも評価のできる好事例となった。さらに、一般社団法人あそび庁とも連携し、「遊び」を軸として、学生が楽しみながらイベントを企画し、子育て世代と交流することによって、子育てを身近に感じることが出来る機会を醸成するものとなった。学生と子育て世代がコミュニケーションができる機会を今後さらに増やしていくことで、こどもへの直接的な支援だけではなく、子育て当事者となる保護者や養育者へのアプローチの必要性を実感することにつながるという効果もある。「社会への厚みを増す」という100か月ビジョンの理念にも合致するとともに、今後、他の保育養成機関にも同様の動きが広がることが期待される。



NPO法人グリーンパプロジェクト
代表理事 吉田 大樹

取組事例③ ところざわ こども・こそだてイベント

大学生

地元企業

その他
地域住民

●取組内容

秋草学園短期大学にて、親子が「ふらっと立ち寄り、ゆっくり交流できる」イベントを開催した。世界の遊び（モルック、ポッチャ等）や身近な素材を使った創作遊びブースに加え、専門家による「発達とあそび」の講話や学生による手遊び・親子遊びを実施した。イベントに留まらず、子育て相談の場も設け、多角的な支援を提供した。

●活動の成果

- 学生コーディネーターが、世界あそび万博での経験を活かして主体的に保護者へ声をかけ、受付や案内で「一歩先」の気配りを見せる大きな成長が見られた。
- 学生が自ら「どうすればもっと地域のこどもたちが楽しめるか」を主体的に考え、状況に応じて臨機応変に動く姿が見られた。学生たちが将来的に保育現場で活躍するにあたり、学生のうちにあそびを通じて保護者と自然に関わる機会が持てた。

●今後の展開

生活圏でのアウトリーチによる周知の多角化を進めるとともに、学生が主体的に運営に関わる仕組みを構築する。あわせて安全性や利便性への配慮を強化することで、継続的で参加しやすい活動を目指す。



活動に参加した方の様子

学生

「はじめの100か月」のこども

- ・ たのしかった！！
- ・ また行きたい。つぎはいつあそべるの？

保護者

- ・ 幅広い年齢層に対応していて、長期的に参加できそうでよかったです
- ・ こどもにとって、とてもよい交流の機会・あそびの機会でした
- ・ 学生さんの笑顔がよかったです！

- ・ 前回のイベントよりも臨機応変に対応し、こどもや保護者と関わることができました。イベント終了間近で、こどもが帰りたくないと言っている様子などが見られ、楽しんでくれたのだと感じ、頑張っって企画を考え、準備してよかったなと思ったし、嬉しかったです
- ・ こどもたちの楽しそうに遊ぶ様子や笑顔が見えて良かったです
- ・ 一緒に遊んでいた子が自分のことを覚えてくれていたことが嬉しかったです
- ・ 保護者の方ともコミュニケーションを取ることができました

地域コーディネーターの声



秋草学園短期大学
地域保育学科 学生

Q：取組を進める中で、苦労した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

「あそびの由来が答えられなかった」「段差に道具が引っかかる」等の予期せぬ課題がありました。当日はこどもの目線に合わせたり、年齢に応じて投げ位置を即興で変えるなど柔軟な対応と、グループの連携を意識して乗り越えることができました。

Q：この活動で得られた経験を、今後どのように活かしていきたいと考えていますか？

こどもがおもちゃをネックレス等に発展させる創造性に驚いたり、片付けを手伝ってくれる子もいて一体感を感じることもできました。小学生が小さい子にルールを教える姿も印象的でした。イベントの最後はみな笑顔で帰っていき、自信にも繋がりました。将来の保育現場では、こどもの主体性を尊重し、保護者の方とも関わりながら、皆で遊びを楽しめる温かな雰囲気作りを大切にしたいです。

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① 「あそび」を入口に、参加のハードルを下げるのが重要です。行政のSNS発信等に加え、日常生活動線での周知や、直接保育施設へ出向く地道なアプローチを通じ、**安心感を醸成して未参加層を呼び込み**ます。
- ② **大学を拠点に、保育学生主体の活動として仕組み化**し、卒業生も関われる体制が理想です。
また、地域のNPOや自治体、既存の子育て支援拠点と連携し、**単発イベントで終わらないことも重要**です。
- ③ SNS等で継続的に発信することで、**若者や多世代ヘビジンの大切さを「自分ごと」として伝えます**。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・ コミュニティの自走には依然として課題が残る。周知面では自治体の広報力に依存している部分が大きく、SNSを利用しない層や、**行政支援が届きにくい潜在的な孤立世帯へのアウトリーチ（スーパーや公園などの生活動線上での周知）の強化**が必要である。
- ・ 運営面では、来場者数が想定を上回った際の導線設計や、多忙な学生間の連携方法など、**持続可能な運営体制にブラッシュアップの余地**がある。

今後の活動の展望

- ・ イベントを単発の点に留めず、地域の保育施設や行政と連携した「面」のネットワークへとつなげる。
- ・ 学生がリーダーシップを持って地域をつなぐ姿を、保育業界の新たなキャリアモデルとして発信する。

特定非営利活動法人新座子育てネットワーク（埼玉県新座市）

子育て支援団体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- 「はじめの100か月の育ちビジョン」は、社会的な共通の基盤として支援者や社会で共有する意識を持ってもらうことが重要であり、その認知度の向上が急務であることから、地域コーディネーター人材の養成を広く推進する必要性を強く認識している。
- 昨年度の実績を基に、埼玉県のほか東京都練馬区・武蔵野市や連携実績のある全国の団体にもお声がけし、活動の場を拡大。各地で地域コーディネーターを養成することで、ビジョンのさらなる普及と先進事例の創出に取り組むと考えた。

活動地域の概況・課題

○活動地域：埼玉県新座市

- 面積 22.78km²、人口 166,169人（R8.2.1時点）
- 埼玉県の南西部に位置し、地域の半分が東京都に接している。

○地域の課題

- 東京都への通勤者が多く、共働きや核家族世帯が多い。
- 都市化や転入者が多いことによる、地域コミュニティの希薄化や、縁故がないことによる子育ての孤立
- 子育て世代の交流拠点へのアクセスビリティ

この事業を通して目指したい姿

前年度事業に引き続き地域コーディネーター養成事業を受託。昨年度、埼玉県内で17名のコーディネーターを要請した実績を踏まえ、**はじめの100か月の育ちビジョンの周知を促進するとともに、子育て支援の実績があり、ビジョンを広げる意欲のある地域コーディネーターの養成を、埼玉県外にも拡大する。**そして、**各地において、ビジョンの重要性を伝え普及する「基点」となる人材や団体を増やしていくことを目指す。**

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

当法人の地域子育て支援拠点事業・利用者支援事業といった地域子育て支援の活動実績から、普段から子育て家庭との信頼関係を築き、地域課題に向き合い、地域のつながりの核になれる人材であることを把握している、子育て支援センター・こどもひろばなど子育て支援で活躍中の方を中心に声をかけた。

募集方法

モデル事業の内容やプロセスを分かり易く示し、ビジョンのポイントを伝えるオリジナルチラシを作成し配布、また、事業専用サイトやSNS等での広報による募集を実施した。事業専用サイトやfacebookグループでは、より詳細な募集情報を発信することや、昨年度の取り組み事例を紹介した。



活動の運営体制・工夫

地域コーディネーター事業の運営体制

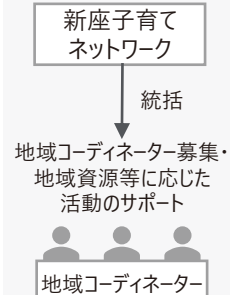
当法人は事業全体の企画・進捗管理を担い、事業専用サイトやメール等での円滑な情報共有により統括機能を担当した。広域から参画する地域コーディネーターに対しては、各地の特性や課題に応じた活動支援を行うため、物品送付等による実務的な後方支援を実施した。

地域コーディネーターのメンバー構成

- 北海道札幌市 2名
- 埼玉県11市 15名
- 東京都練馬区 4名
- 岐阜県大垣市 2名
- 愛知県名古屋 4名
- 香川県高松市 1名

地域コーディネーター同士のつながりを創るための工夫

前年度事業で開設したfacebookグループ「はじめの100か月の育ちビジョン・地域コーディネーター」や事業専用サイトを活用し、他地域で活躍する地域コーディネーターの活動状況を共有することなどを通して交流を促した。あわせて、メンバーリストを構築しビジョンに関する最新情報を配信し、全国的な情報共有と連帯感の醸成を図った。



各コーディネーターの活動を通じて感じていること

団体職員の方の声

Q：地域コーディネーターを募集するにあたって、どのような方に参画してほしいと思っていましたか？

新座子育てネットワークでは、発足当初から地域子育て支援に尽力してきました。地域子育て支援では、地域支援、地域の子育て支援機能の充実が期待されており、子育て支援センター等で活躍中の方は、普段から、子育て家庭との信頼関係を築き、地域課題に向き合い、つながりの核となれる人材です。ビジョンを身に付け活動ができる、熱意ある方に参画していただきたいと思います。

Q：地域コーディネーターの方々の活動を支援するにあたって、どのようなことを意識されていましたか？

事業専用サイトに情報を集積し、研修に関する情報やご連絡をタイムリーに、確実に届けるようにしました。また、地域コーディネーターの募集段階で、各地域資源を活かした取組予定案を確認し、コーディネーターが効果的に活動実施できるよう、活動に関する個別のご相談への丁寧な対応を心掛けました。

Q：今後、各地域で取組を進めていくためにはどのようなことが必要だと感じますか？

今後、各地で地域コーディネーターを養成し、ビジョンをより多くの人へ届けるためには、各地域の核となる人材とのつながりが重要だと考えます。こうした地域のキーマンに、本ビジョンや事業、活動の情報を、丁寧に届け、理解を深めてもらうことが大切です。特にこの2年間の先進事例は、キーマンを動かし活動を広げるための重要な鍵となります。そのため、各情報へのアクセスのしやすさは、非常に重要になってくると感じます。



NPO法人
新座子育てネットワーク
事務局
長谷川 清香

特定非営利活動法人新座子育てネットワークの紹介

1999年に発足し、設立26周年を迎えた。主な活動実績は、団体発足時からの地域子育て支援の実績（子育て支援拠点3か所、利用者支援事業2か所の運営受託）や児童センター2館の指定管理受託、埼玉県こどもの居場所づくり支援事業、埼玉県・内閣府「孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」など。また、地域子育て支援拠点事業の公的事業化や支援者の育成に貢献、こども・子育ての現代的課題に果敢に挑戦している。



07 特定非営利活動法人新座子育てネットワーク

取組事例① ミニしめ縄づくり

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

地域コーディネーターが所属する汽車ぽっぽ保育園きざろ子育て支援センターの利用者と、川口市神根地域包括支援センターを利用する高齢者が保育園のホールで一緒にしめ縄づくりを行った。

日頃から連携している両施設で年の瀬に向けた企画が立ち上がり、神根保健ステーションも協力し、ビジョンを組み込んだ形で実現したものである。

●活動の成果

- ・活動を通して、面識のない世代が顔見知りになり共に声を掛け合えるような交流が生まれ、初対面の高齢者と親子が自然に声をかけ作業のサポートをしあったりする姿が見られた。
- ・在園児のダンスや歌の披露により、地域のこどもとして親しみをもたれ、周囲は保育園が地域交流の場として認識してもらえたと感じた。
- ・保護者からは、ビジョンについて知らなかったが、国で子育てにこんなバックアップをしてくれていることを知ってうれしいとの感想があった。

●今後の展開

今後の展開として、地域のNPO法人など他の地域資源を巻き込んで、ビジョンを広げる活動をおこない、さらにビジョンの共感を広げていきたいと考えている。



取組事例② 地域deウェルビーイング

小中高生

その他
地域住民

●取組内容

市内中学校の家庭科の授業内において、乳幼児親子と中学二年生が触れ合う交流の場を設け、命の大切さや子育ての大変さについて学ぶ機会とした。あわせて、「はじめの100か月の育ちビジョン」の重要性に関するオリエンテーションを行うとともに、遊びを通じた交流や育児中の保護者等との対話を実施した。

●活動の成果

- ・中学生にとっては、地域の方々との対話、コミュニケーション力を図るという挑戦ができた。また、興味を持って関わることで自分たちが担えることもあると確認でき、地域全体でこどもの育ちを見守ることが地域の幸せにつながるということを共有できた。
- ・保護者側から、「子育ては孤独で不安で日々正解がわからない事ばかりだったけど、中学生にありがとうと言ってもらえて自分も社会に貢献できているのかもと思った」との感想があり、保護者のウェルビーイングの支援にも繋がったと感じた。

●今後の展開

学校の時間割との調整を図りながら、中学生と乳幼児のふれあい時間を十分に確保するとともに、地域の小学生に対しても短時間の講座を通じて「はじめの100か月の育ちビジョン」を伝えていく。



地域コーディネーターの声

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

現在、保育園に併設された子育て支援センターに勤務しています。その中で、子育てをしている家庭と地域がつながり、子育て家庭を温かく見守る環境が大切だと感じました。私もその一員として、保護者の方に寄り添いながら、安心して子育てできる地域づくりに関わりたいと思い、コーディネーター養成講座に参加しました。



社会福祉法人 けやき福祉会 汽車ぽっぽ保育園きざろ子育て支援センターばれっと
大吉 絵美子

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気づきがありましたか？

一度に多世代と関わり、その好循環を伝えていくのはすぐには難しいと感じました。一人ひとりが地域の一員であることを意識して生活し、個々の幸せな状態をより良く保ち続けることで少しずつ地域社会の好循環につながると実感しました。そして、この活動が伝え継がれていくことこそ全ての人の幸福度アップに直結すると感じました。



NPO法人 AIKURU
武井 由加理

委員からのコメント

本法人の取組みの特徴は、自分たちの組織の中だけで、直接的に活動を企画・運営するのではなく、幅広い地域で、元々、その地域に根付いて活動を展開している子育てに関わる団体や人材とつながり、それらの活動をバックアップする形で、全国各地でのビジョンの周知や地域コーディネーターの養成、活躍の場の拡大を図ろうとしている点にあります。実際に、取組事例③を視察させていただきましたが、その地域の実態や課題を熟知している地域の子育て視点の拠点で活躍している人材がコーディネーターとなるからこそ、その地域の親子にとって、最も必要な活動やその展開の方法をこまやかに考え、様々な地域資源と繋げていくことができることが伝わってきました。それぞれの地域の実態に即した活動の展開を促進していくために、このような「コーディネーターのコーディネート」をする役割も重要になってくると思われます。



聖心女子大学
現代教養学部教育学科
高嶋 景子 教授

取組事例③ 赤さんぽ

高齢者

その他
地域住民

●取組内容

おやこ広場もくれんハウスに集合後、親子で散歩をしながら交流を深め、新倉ふるさと民家園へ移動した。到着後は古民家サポーターによる施設紹介を受け、民家園の畑で採れた真綿を用いた糸繰りの見学・体験を行うとともに、「はじめての100か月の育ちビジョン」の紹介と参加者同士の感想共有を実施した。

●活動の成果

- ・転出入が多いため、地域のことを知らない子育て世代が多い。本取組を通じて地域の魅力を知ってもらうことができ、地域資源に目を向けるきっかけとなった。
- ・子育て世代と高齢者世代の交流を促進することができた。

●今後の展開

企画の目的や「はじめての100か月ビジョン」について事前にスタッフ間で十分に共有できるよう、研修時間の確保や研修資料の整備を進める必要がある。また、今後は歩行期以降のこどもが参加する場合の運営方法や対応についても検討し、活動の充実を図っていく。



活動に参加した方の様子

「はじめての100か月」のこども

- ・日常とは異なる古民家という環境の中で過ごすことで、乳幼児親子にとって新鮮な刺激が得られた
- ・こども同士の関わりだけでなく、普段は接する機会の少ない高齢者の方に声をかけてもらうなど、和やかな時間を過ごすことができた

高齢者世代

- ・若いママさんとこどもたちに来てもらえてよかった。ここは季節のいろんな行事をやっているの、またぜひ遊びに来てください（古民家サポーターより）

保護者

- ・お散歩するくらいのイメージで参加させていただきましたが、民家園についても詳しく知ることができ、和光の新たな魅力を感じることができました。天気もよく、きもちのよいお散歩＆学びの機会になりました。またこういったイベントを企画していただきたいです
- ・こどもが生まれてから、こうやってゆっくりお話を聞きながら見学をする機会ってなかなかないので、また新たに和光市の魅力を知れて良かったです
- ・100か月ビジョンは素敵な考え方だと思い、地域の方にも支えていただきながら、また地域のこういった施設も積極的に活用しながら子育てに励んでいけたらと思いました

地域コーディネーターの声



NPO法人
わこう子育てネットワーク
代表理事
南條 有希子

Q：取組を進める中で、苦労した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

今回の協力先が重要文化財の古民家ということで、「はじめての100か月ビジョン」をどのように共有しようか迷いましたが、古民家サポーターの協力でプロジェクターを準備して頂き、協力して座学の時間を作ることができました。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

今回できた繋がりを次年度にもつなげ、新たに子育てを始めた子育て世代に広めていきたいです。次年度も「赤さんぽ」の企画を続けて実施する予定です。

実践のポイント ～「はじめての100か月」を起点とした地域づくりを持続可能なものとしていくためには～

- ① **情報のアクセシビリティの向上**：ビジョンや事業の情報を含め「真似してやってみよう」と思える活動事例にアクセスしやすいこと。
- ② **地域連携の促進**：地域子育て支援で期待されている「地域の子育て支援機能の充実」、「地域支援」に**ビジョンの普及啓発を位置付け、地域の各種ステークホルダーとの協働を促進**。
- ③ **地域コーディネーターの活躍**：誕生した地域コーディネーターが**各地のキーマンとなり、ビジョンの普及啓発に協働**する/子育て支援関係者や活動団体などの**拡大に貢献**する。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・「はじめての100か月の育ちビジョン」は、**社会的な共通の基盤として意識をもってもらうことが大事**であるが、現場レベルでの認知は緒についたばかりであり、自治体におけるビジョンの認知は稀有に近く、行政主体でビジョンの普及を図る状況には至っていない。**今後各地域の核となる人材との連携強化や、ビジョンや活動の情報を丁寧に届け、知識・情報・考え方を共有することが急務**となっている。

今後の活動の展望

- ・2年間の事業を通して誕生した45人の地域コーディネーターをキーマンとして各地域での更なる地域コーディネーターの誕生と、各地域社会へのビジョン浸透に向けて連携を強化する。
- ・地域コーディネーターの活動促進や交流の場の創出、効果的な情報公開・展開手法を検討する。

特定非営利活動法人びーのびーの（神奈川県横浜市）

子育て支援団体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

- ・2000年に子育て中の親たちで「おやこの広場びーのびーの」を開設して以来、「子育てを誇りに、『私』を誇りに」を理念に、子育て家庭に寄り添い、親子が孤立しないよう、共に学び、育ち合う場づくりを進めてきた。具体的には、地域子育て支援拠点、親と子のつどいの広場、認可保育所の運営、多世代交流の場づくり等を実施している。
- ・本事業に取り組むことで、地域、行政、企業、教育機関、専門機関等と積極的に連携・協働しながら、「地域とのつながりによる『みんなで子育て』の実現」に向けて活動を進めている。

活動地域の概況・課題

○活動地域：神奈川県横浜市港北区

- ・面積 31.4km²、人口 367,741人（R8.1.1時点）
- ・全国の政令指定都市の中でも出生数が多く、今後も一定期間は人口増加が見込まれる地域である。

○地域の課題

- ・子育て支援や市民活動は活発であるものの、個々の取組にとどまり、地域全体で共通の視点や理念を共有できていないという課題がある。
- ・こどもの育ちや未来に関心を持ち、関わりたいと願う人は地域の中に数多く存在するが、その思いや力が活かされ、つながり合う仕組みはまだ十分とは言えない。

この事業を通して目指したい姿

当法人は、こども・子育てをまんなかに据え、多様な主体が関わるプロセスそのものが人を育て、地域に好循環をもたらす実践を25年にわたり積み重ねてきた。「はじめの100か月の育ちビジョン」を共通の理念とし、一人ひとりの中にある「こどもの育ちに関わりたい」というスイッチをオンにする機会を広げていく。それによって、市民が役割や立場を超えてつながり、学び合い、支え合う地域を目指す。人と人、活動と活動がゆるやかに結ばれ、こどもの育ちを地域全体で支える文化が根づくことが、目指す姿である。

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

当法人は、「多くの市民が一体感を持って子育て支援活動を展開する」ことを目標に地域コーディネーターの養成に取り組んだ。子育て家庭と地域に暮らすすべての人との自然なつながりを創出するため、主に法人外から多様な世代・立場の方を募集し、ビジョンの理念を普及するよう努めた。

地域コーディネーターの募集方法

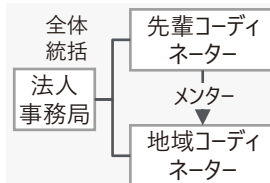
法人の拠点の利用者やボランティア、大学生のインターン等に個別に声をかけた。また、協働するNPO法人アクションポート横浜の大学生スタッフからも募集した。

活動の運営体制

昨年度養成した地域コーディネーターが先輩コーディネーターとして、今年度養成する地域コーディネーターのメンターを担った。また、地域コーディネーターの活動は、事業ごとの縦割り構造を超えた横断的な支援体制を築いていくため、法人の特定事業には限定せず、法人全体の活動に関わってもらった。

地域コーディネーターのメンバー構成

会社員、学生、主婦、PTA役員、地域の子育て支援者等、20代から60代まで世代も立場も多様な8名の方が参画した。



地域コーディネーター養成事業に取り組んでみて感じたこと

本事業の活動を通して、子育ては親や家族だけで担うものではなく地域や行政、さまざまな立場の人々が関わり合いながら、地域全体で支えていくことが重要であることを再認識した。ビジョンの普及啓発にあたっては、「はじめの100か月」という言葉から、特定の世代のみに閉じたビジョンと捉えられないよう、すべての世代に丁寧で分かりやすい説明が重要だという気付きが得られた。

また、地域コーディネーターが活動を続ける中で、協力者や発信先の広がりを実感し、それらのつながりによって「こどもまんなか社会」の実現へ一歩ずつ近づいているという実感を持った。

団体職員の方の声

Q：地域コーディネーターの方々の関わりによって、団体の活動にどんな変化がありましたか？

法人の職員だけでは得られなかった発想や活動の広がりが生まれました。ビジョンの啓発や各活動の運営を主体的に進めていただいたことはもちろんのこと、日々の業務を効率的に行うためのアドバイスや子育て支援に関連のある情報の提供等、幅広い場面で力を貸していただきました。

Q：地域コーディネーターの方には、どのようにしてコーディネーターになっていただいたのですか？

法人の拠点の利用者やボランティアの方にスタッフが直接声をかけて打診しました。また、NPO法人アクションポート横浜との協働により、活動に関心を示した大学生にも参画していただくことができました。

Q：地域コーディネーターや団体職員同士での協働を生み出すために、どのような工夫をされていましたか？

Slackを利用して、気軽にコミュニケーションをとれるようにしました。皆さんが感じたことを投稿し、それに対する思いのリアクションや返信が寄せられました。また、月に1度オンラインで定例会議を開いたほか、12月には法人の拠点に集まってワークショップを実施しました。



NPO法人びーのびーの
事務局職員

特定非営利活動法人びーのびーのの紹介

横浜市港北区において、地域子育て支援拠点事業を2か所運営し、そのなかでファミリー・サポート・センター事業や利用者支援事業基本型、一時預かり事業、こども誰でも通園制度の試行実施を行っている。ほかに、親と子のつどいの広場事業、認可保育所や地域福祉交流スペースの運営、産前産後ヘルパー派遣事業、育児支援家庭訪問事業等、子育て支援に関する事業を幅広く実施している。



NPO法人
びーのびーの

取組事例① 乳幼児とのふれあい体験事業

小中高生

その他
地域住民

●取組内容

市内の公立小・中・高等学校からの依頼に基づき、学校に子育て家庭とともに出張する、もしくは小中高生を地域子育て支援拠点等に受け入れる事業において、地域コーディネーターが「はじめての100か月」の大切さやビジョンの普及啓発を行った。親子で参加する地域コーディネーターもあり、先輩家庭として、子育てや「はじめての100か月」の大切さについて学生に伝えた。



●活動の成果

- ・昨年度養成した地域コーディネーターの働きかけにより、新たな学校での事業の実施が実現するなど、先輩コーディネーターが活動に関わり続けることで、連携先を増やすことにつながった。
- ・地域コーディネーターの働きかけにより、地域のラジオ体操会の成人メンバーを地域子育て支援拠点に受け入れる等、学校以外の連携先がうまれた。



●今後の展開

次年度以降も、可能な限り本事業内でのビジョンの普及等を行えるよう努めていく。また、地域コーディネーターが持つ地域とのつながりを強みに、新たな学校でのふれあい体験事業の実施を目指す。

取組事例② 地元企業等へのビジョンの普及

地元企業

●取組内容

横浜市の横浜子育て家庭応援事業（ハマハグ）に協賛している店舗とその利用者を対象に昨年度実施したアンケートの結果を踏まえ、子育て世帯を応援するまちづくりについて、地域の店舗や施設の視点から検討した。さらに、ハマハグ協賛店舗へのインタビューを実施し、地域の子育て世帯への思いや取組内容について共有した。

また、横浜アリーナで開催された「秋のヨコアリくんまつり」においては、「はじめての100か月の育ちビジョン」の普及啓発ブースを出展した。



●活動の成果

昨年度実施したアンケートの結果を活かし、企業や店舗に対するビジョンの普及やこどもまんなか社会に対する思いの共有を行うなど、一歩深めた活動となった。また、横浜市のハマハグ担当職員との面談を行い、現場で感じる課題感や今後の展望について意見交換を行った。



●今後の展開

法人独自の地域コーディネーター認定制度や研修の構築を検討している。この研修を企業向けに展開することも視野に入れている。

地域コーディネーターの声

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

保育学生として「はじめての100か月の育ちビジョン」に共感したからです。ビジョンの内容は当たり前のことのように、こどもの健やかな育ちのために最も大切な視点だと感じました。また、これまでボランティアでお世話になっていた法人に協力できると考えたことも動機の一つです。



大学生

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気づきがありましたか？

活動を通して、地域コーディネーターとして参加する自分が圧倒されるほど、主体的な思いを持って地域の子育てに貢献しようとする方々が数多くいることを知りました。その姿に触れる中で、私も地域への関心を高め、こどもの育ちや支援を自分ごととして捉えられるようになりました。また、地域の人と人との繋がりが支援に役立つと学び、自分もその一員として支援に関わる意義を実感しています。

委員からのコメント

「はじめての100か月の育ちビジョン」について学んだことが、多様な世代や活動動機をもつ地域コーディネーターどうしのコミュニケーションの糸口になったり、子育て世代に積極的な声掛けや自分なりのアドバイス等ができる自信につながったりしている姿を、今回、見させていただくことができました。また、さまざまな年齢や立場、経験、特技などを持つ方々がこどもの育ちに関わる場づくりを団体として意識されており、そのことがおとなだけでなくこどもにとっても、一人ひとりの多様性を尊重できるようにする学びの場にもつながっているように感じました。



文部科学省 国立教育政策研究所
生涯学習政策研究部 総括研究官
社会教育実践研究センター 社会教育調査官
志々田 まなみ

取組事例③ こども食堂（よるによる会）

その他
地域住民

●取組内容

当法人が月に1～2回程度実施しているこども食堂（よるによる会）において、地域コーディネーターが企画運営や食事づくり、交流の場としての雰囲気づくりを行うとともに、ビジョンの普及啓発を行った。

こども食堂の参加者は、幼児・小学生・保護者・地域の大人と非常に幅広いことを踏まえ、ビジョンをわかりやすく伝えるため、キーワード入りのフリップボードを示しながら、パペット人形の掛け合いを用いて平易で共有しやすい表現で説明した。

●活動の成果

- ・地域コーディネーターの創意工夫により、ビジョンの説明について「わかりやすかった」「意味を十分に理解できた」という声が多く寄せられた。

●今後の展開

多様な世代に対するビジョンの普及や、地域のつながりを大切に子育てをしていく環境づくりを目指して活動を続けていく。



保護者

「はじめの100か月」のこども

- ・こども食堂では、乳幼児と地域コーディネーター及び大学生とのあいだに自然な関わりが生まれ、その交流によって活気ある雰囲気となっていた
- ・乳幼児とのふれあい体験事業では、はじめは保護者から離れられなかった乳幼児が、次第に児童生徒とふれあい、抱っこをされたりおもちゃのやりとりをする場面が印象的だった

- ・乳幼児とのふれあい体験事業では、保護者から生徒児童に対して、こどもを愛おしく思う気持ちや、一人ひとりが大切な存在であるというメッセージが伝えられた
- ・こども食堂では、パペットを使ったビジョンの説明に注目し、大きくうなずく姿が見られた

小中学生

- ・秋のヨコアリくんまつりの出展ブースでは、ビジョンや法人の活動を紹介する動画に足を止め、ビジョンの内容に興味を示すこどもの姿があった
- ・ふれあい体験事業では、参加した乳幼児に「かわいい、かわいい」と声をかけ、恐る恐るながらも抱っこをするなど、乳幼児への興味関心が強まる様子が見られた

大学生

- ・友人とともにこども食堂に参加するなど、学生の地域コーディネーターの働きかけにより、活動に携わる人の輪が広がった
- ・地域の店舗へのインタビュー取材を担当し、店舗が集客や売り上げ向上のためではなく、「子育てを応援したい」という思いをもってハマハグに協賛していることがわかった

地域コーディネーターの声



法人（どろっぶ）スタッフ

Q：取組を進める中で、苦勞した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

継続的に行っている取組みに偏ることなく、幅広い年代や地域全体へどのように周知しアプローチしていくか、また行政や関係機関との連携や、共通認識の共有などにおいて苦勞がありました。そして、地域コーディネーターとしての立場や役割の落としどころを模索しましたが、コーディネーター交流会などで出会った全国各地のコーディネーターの皆さまの存在が励みとなり、地域の方々と関わる中で少しずつ自分の役割を見つけ、主体的に取組むことができました。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

顔の見える関係やつながりが生まれ、活動を知っていただく機会が増えたことで、地域でこどもや家庭を見守り支える意識が少しずつ広がっています。こうした取組みは、地域全体で子育て家庭を支えていく基盤づくりや、ウェルビーイングの向上にもつながっていると感じています。

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① 乳幼児と触れ合う場でビジョンを普及することで、はじめの100か月を大切にすることの意義をより深く伝えることができた。
- ② 法人内の各拠点で実施するこども食堂に地域コーディネーターが参加することで、区内の複数の地域の方々と交流し、つながりを生むことができた。
- ③ ハマハグ協賛店舗を中心に個別に連絡を取り、ビジョンや店舗の取り組み、思いを共有することができた。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・当法人の地域コーディネーターは多様な世代、立場の方々と構成されている。これにより、法人スタッフだけでは気づき得なかった視点からの意見や活動の広がりが見られ、「地域全体で子育てを支えていく」という目標に近づくことができた。
- ・一方で、こどもに近い立場だけではなく「企業等も含んだ地域」への広がりには課題がある。このため、2026年度以降、企業への研修等を実施することを計画している。

今後の活動の展望

多様な主体との関係が広がる一方で、取組を継続・発展させるためには、担い手同士がつながり、学び合い、支え合う仕組みが不可欠である。今後は当法人独自のコーディネーター制度とプラットフォームの構築を検討することで、2027年度以降もビジョンが地域に定着していく体制づくりを目指す。

株式会社エルパティオ（愛媛県松山市）

子育て支援団体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

当社が行う産後ケア事業や保育事業の現場では、母親の声が日常的に集まる。そこから見てきたのは、制度や支援が存在している、それらが十分に繋がって
おらず、家庭側からは「点」としてしか認識されていないということだった。
また、不安や違和感が生まれた初期段階では「相談するほどではない」と感じる母親も多く、支援はどうしても後追いになりやすい構造があった。これまでの実践を通じて私たちは、支援を増やすこと以上に、地域の中で支援を「つなぐ人」の存在が不可欠であると思った。制度と家庭を結び、支援を特別なものではなく、日常の文化へと変えていきたいと思い取り組んだ。

この事業を通して目指したい姿

- ・いつでも誰かと自然につながれる：妊娠期から子育て中まで、孤立せずに相談できる
 - ・支援が暮らしの一部になる：特別なサービスではなく、日常の中にサポートが存在する
 - ・みんなが対等なパートナー：専門職、当事者、市民が同じ立場で関わり合う
- こうした社会を実現するために、こどもと家庭を地域社会全体で温かく見守る仕組みをつくり、「支援される側」から「支える担い手」に変化していく「支え合いの循環モデル」を構築することを目指す。

活動地域の概況・課題

○活動地域：愛媛県松山市

・面積 429.35km²、人口 494,064人（R8.1.1時点）

○地域の課題

- ・妊娠期から就学前まで、支援制度や支援の場は存在しているが、家庭から見ると分断され、全体像が見えにくい。
- ・産後や発達の気がかりなど、不安がうまれた初期段階から相談できる相手が限定的。
- ・支援が「必要になってからつながる」構造になりやすく、孤立や困りごとが深まってから顕在化しやすい。

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

支援制度の隙間、未熟児・医療的ケア児、多胎児家庭への支援不足など、現場で顕在化している課題に対して、共感と実践力をもつ「地域子育てコーディネーター」を育成することで、地域資源の分断を乗り越え、有機的な連携を生み出せるよう、松山市や近隣地域において、こどもや家庭への支援を「つなぐ」役割を担っている方を募集した。

募集方法

当社がこれまでの活動で培ってきた、支援団体や支援者とのネットワークを活かし、本事業の周知と地域コーディネーターの募集をリアルな声かけとSNSで呼びかけた。（受付方法はGoogleフォームを利用）



活動の運営体制・工夫

地域コーディネーター事業の運営体制

当社を実施主体とし、関係企業や関係機関との役割分担を明確にし、各主体が有する専門性と現場力の双方を発揮できるよう、以下の体制で運営体制を構築した。

- ①事業統括チーム ②育成・研修チーム ③地域連携・実践チーム ④広報チーム

地域コーディネーター同士のつながりを創るための工夫

- ・地域コーディネーター候補者に説明会や交流会・企画会議を実施し、事業への理解促進や、地域コーディネーター同士の交流を通して、相互理解や協力体制を強化した。
- ・こども家庭庁の養成研修に加えて、独自講座を5回にわたって実施した。

地域コーディネーターのメンバー構成

- ・地域で母親と赤ちゃんが安心して集えるレッスンやワークショップを運営している方
 - ・産後ケアの場をつくり、母親の回復とつながりを支えている方
 - ・自然保育や少人数保育を実践し、育ちの土台を支えている方
 - ・まちづくりや地域活動に関わり、世代を超えた関係を育てている方
 - ・療育が必要なこどもと家庭に寄り添い、支援につないでいる方
 - ・病気のこどものきょうだい児を支え、家庭全体を見ている方
 - ・教育に携わり、こどもの学びと育ちを長期的に見守っている方
- ・・・等、約35名が参加

各コーディネーターの活動を通じて感じていること

団体職員の方の声

Q：地域コーディネーター事業の活動において、大切にしていた考え方はありますか？

職場も立場も違うみなさんに仲間意識を持っていただくために、「対面での会話」ができる場面を大事にしました。顔合わせ会や、独自講座でのグループワーク、振り返り会を通じて、お互いを知る事、「はじめの100か月の育ちビジョン」を地域に広め、自らも体感するという共通の目標に向かって活動することで、チームワークが発揮できたと感じています

Q：地域コーディネーターの方々の活動を支援するにあたって、どのようなことを意識されていましたか？

みなさんに安心して活動に参加していただくために、グループLINEでこまめに伝達を行ったり、小さなお子様がいる方の為に託児スタッフを手配するとともに安全にお子様をお預かりできる場所なのか会場下見なども行いました。また、社外活動の際は、イベント保険に都度加入し万が一の際の備えにも気を配りました。

Q：地域コーディネーターの方々の活動をご覧になる中で、どのようなことを感じましたか？

資格の有無や年齢に関係なく、地域や親子の為に役に立ちたいと思っている方がたくさんいることに気が付きました。一人一人の力は小さくても、こうして団体で活動することで、親子と地域の方たちをつなぐという活動の一步を踏み出せたことに手ごたえを感じています。



株式会社エルパティオ
玉井絵里子
（執行役員）

株式会社エルパティオの紹介

「わたしに優しい社会を創る！」ママ＆女性＆地域のあったらいいな！をカタチにすることを目指し、妊娠期から就学前までを“家庭まるごと”支える地域モデルを実践。創業以来、19年間、えひめママハウスやエルパティオ保育園を通して、産前産後・保育・母親の学びを切れ目なく事業を展開している。



ママ＆地域のあったらいいな！をカタチに

株式会社 エルパティオ
EL PATIO Co., Ltd.

取組事例① 独自講座の開講

地元企業

その他
地域住民

●取組内容

単なる座学ではなく、行政施策からまちづくりまで、社会資源をつなぐ視点を目的で企画した。
多世代・多分野の地域のキーパーソンを巻き込むカリキュラムとなるように実施した。

第一回：地域を知る（松山市子ども家庭部こどもえがお課 主査 遠富氏）

第二回：こどもの発達と多様性を知る（認定NPO法人ラ・ファミリエ 理事 西氏）

第三回：SNS発信の本質を知る（デザインコーチ 石堀氏）

第四回：まちづくりの現状を知る（三津浜公民館 館長 門田氏 / 松山市坂の上の雲まちづくり部
まちづくり推進課 山崎氏）

第五回：フィールドワーク（Co-earth 代表 松本氏）

●活動の成果

多分野にわたる地域コーディネーター同士が、グループディスカッションや実践ワークを通じて互いの専門性を理解し、「役割の違い」ではなく「補完関係」にあることを認識できた。地域全体を俯瞰する視点を持つようになり、「自分の現場」から「地域の構造」へと意識が拡張した。

●今後の展開

地域内での連携事例を蓄積し、活動プロセスをモデル化・可視化することで、他地域でも再現可能な養成プログラムへと発展させる。



取組事例② 妊婦・産後ママ向け「はじめの一步」カフェ

●取組内容

当法人の拠点（えひめママハウス）を活用し、地域コーディネーターと親子が、手遊びや簡単な製作をしながらゆったりと過ごし、子育てを孤立させることなく、ゆるやかに継続できるつながりづくりをしながら、ビジョンについて知ってもらうきっかけを創出した。

季節にあわせた小物の製作や手遊び、読み聞かせ、親子でできる簡単な運動などの企画を通して、参加者同士の交流を図るとともに、親子にビジョンの内容を理解してもらえるよう、地域コーディネーターが紙芝居やペープサートを作成して、わかりやすく説明した。

●活動の成果

- ・親子がゆったりと過ごす場を提供することができ、母親同士での交流につなげることができた。
- ・同じくらいの年齢の母親と悩みを共有したり先輩ママの話を聞くことで、安心して過ごす時間を提供することができた。

●今後の展開

乳幼児の親子だけでなく、これから親になる方や地域の方に参加していただけるよう、アプローチの仕方を検討する。



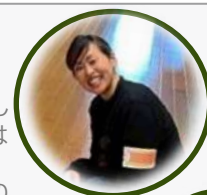
地域コーディネーターの声

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

私はこれまで、森のようちえんや自然体験キャンプ、プレーパークの現場で、子どもたちが環境に関わり、試行錯誤しながら育つ「自己教育力」を目の当たりにしてきました。大人が教え込むのではなく信じて待つことで、子どもたちは自らの根っこを伸ばしていきます。子ども家庭庁の「はじめの100か月の育ちビジョン」にも深く共鳴しており、今回、愛媛での地域コーディネーター養成の機会を知り、保護者・地域・専門機関をつなぎ、こどもの「やりたい」と大人の「支えたい」を結び架け橋になりたいと考え応募しました。

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気づきがありましたか？

地域コーディネーターとして活動する中で、大学生や高齢者など関わる世代を広げることで、同じ団体の発信でも参加する親子の層が変わり、これまで出会えなかった子育て世代ともつながれることに気づきました。独自講座を通してコーディネーター同士がアイデアを共有し、「100か月の育ちビジョン」という共通認識のもと、保育士、子育て支援団体、個人事業主など多様な主体がそれぞれの強みを活かしながら連携できることを実感しました。



松本みちよ



三原奈美

委員からのコメント

エルパティオはこれまで培ってきた子育て支援の活動をベースにして、これまで届きにくかった層にアプローチすべく、独自の講座や様々なイベントを企画し、多くの地域コーディネーターを輩出したことは高く評価できる。

これらの事業が展開されてきた一連の流れは非常に戦略的な試みであった。そこには、『はじめの100か月の育ちビジョン』への理解と、この事業を松山市だけではなく、他の地域にも広げていきたいというさらなる展望が根底にあるからであり、今後の地域の子育て支援のあり方としても期待できるものがあった。

さらに、大学と連携しながら、ママ・乳幼児と学生が同じ時間・空間を共有することは、「社会の厚みを増す」という理念に沿うものであり、今後の継続を期待したい。

NPO法人グリーンバプロジェクト
代表理事 吉田大樹

取組事例③ 大学生×子育て中のママ交流会

大学生

●取組内容

松山東雲女子大学の柔道場を会場に、保育科の大学生、乳幼児親子、地域コーディネーターが世代を越えて交わる交流機会を創出した。ビジョンを体験を通じて共有することを重視した。ビジョンを巻物形式で可視化しながら説明を行い、リトミックや手遊びを通して場の一体感を醸成した。単なる交流イベントではなく、「はじめての100か月」を自分事として考える対話の場として企画した。



●活動の成果

- ・「はじめての100か月」の親子はもちろん、参加した大学生なども「こどもまんなか」やビジョンについて、体験を通じて学ぶ機会を提供できた。
- ・参加した大学生は保育士や幼稚園教諭をめざす学生がほとんどだったため、将来の仕事について考える機会となった。学生の積極的な様子を見て、未来の子育て環境にも希望を感じた。

●今後の展開

大学との継続的な連携体制を整え、若者世代が地域子育ての担い手として育つ循環モデルを構築する。



「はじめての100か月」のこども

- ・最初はお母さんの後ろに隠れていた1歳の男の子が、音楽が流れると少しずつ体を揺らし始め、最後には大学生のお姉さんと手をつないで笑顔で走り回る姿が見られた
- ・最初は緊張した様子だったが、学生が顔を近づけて笑いかけると、安心したのか、少しずつ表情がやわらいでいった

活動に参加した方の様子

保護者

- ・子育ては1人ではないこと、多くの人との関わりがこどもにとって大切だということを改めて感じることができました
- ・はじめての100か月がこどもの成長で、改めて大切な期間なのだと、再確認できました。個で子育てをする世の中になってきているので、社会全体でこどもたちの育ちを応援していこうという環境作りは、心強いです

大学生・大学職員

- ・親子と同じ目線で一緒に体を動かしたり、話を聞いたりする中で、保育は教室の中だけではなく、地域の中にあるものだと感じました
- ・子育て中に話せたり触れ合えたりする場合は、保護者にとって大きな支えになります。学生にとっても、こどもだけでなく保護者や保育士・リトミック講師との交流は貴重な学びとなりました

地域コーディネーター

- ・大学生と子育て中のママが世代を超えてつながる機会となりました。地域コーディネーターとしての意識も高まり、横のつながりが広がったことが大きな収穫です。家族以外との関わりに不安を抱える親にとっても、多様なつながりを実感できる交流会となりました

地域コーディネーターの声



西岡佳奈子

Q：取組を進める中で、苦労した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

取組当初は、地域コーディネーターの役割や自分に何ができるのかわからず戸惑いもありました。また、「はじめての100か月ビジョン」を分かりやすく届けながら、こどもたちから大人まで様々な世代の人が心地よく過ごせる場づくりに悩みました。学びと対話を重ねる中で視野が広がり、成長につながりました。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

本取組を通して、地域にはこどもや家庭を支えたいという思いを持つ多様な人材が存在し、その力をつなぐことで支援の可能性が広がることを実感しました。今後は、地域コーディネーターの実践を単発の活動にとどめず、地域で継続的に機能する仕組みとして定着させていきたいと考えています。また、活動のプロセスや連携のあり方を整理・可視化し、愛媛発の地域モデルとして他地域にも展開していきます。



西朋子

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① 「一緒に地域の未来を設計する」という関係性をつくること、「相手をかっこよくさせる」マインドを重視した。
- ② 理念や理論を説明するのではなく、まず“安心できる場”をつくることを優先した。
- ③ 講義形式ではなく「体験」と「対話」を重視。ビジョンを分かりやすく伝える巻物を使って「自分もまた地域に育てられてきた存在である」ことに気づく機会を設けた。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

愛媛県内の多くの方に地域コーディネーターとして参画いただくことができ、今後は講座で学んで終わりではなく、**地域の中で「支援の隙間で動き続ける役割」として根付くことができるよう、仕組み化・モデル化**に引き続き取り組んでいく必要がある。

今後の活動の展望

- ・妊娠前から就学前まで、「気づいたときに、誰かがそばにいる」地域の支援構造を定着させる。
- ・地域子育てコーディネーターを核に、保育・医療・療育・行政・市民がゆるやかにつながる仕組みを広げる。
- ・当事者の声・地域の工夫を可視化し、他地域へ共有・横展開していく。
- ・支援が特別なものではなく、日常の中にある文化として根付くモデルを目指す。

有限会社ミュージズプランニング（熊本県益城町）

子育て支援団体

団体として地域コーディネーター養成に取り組もうと思った理由

1997年の創業以来、「すべての女性の自分らしく働く・暮らすを応援します」をビジョンに掲げ、子育て支援、ひとり親家庭支援、男女共同参画、多世代への情報発信に取り組んできた。

昨年度は熊本市を対象地域とし本事業を受託し、13人のコーディネーターを養成した。その実績をもとに、今年度は当社が拠点を置く益城町において本事業を実施し、熊本地震後からの復興と魅力的なまちづくりに寄与したいということで、再度コーディネーター養成に手を挙げた。

この事業を通して目指したい姿

益城町において「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」を広く伝え、「こどもまんなか社会」の実現に向けた取組を推進していく。熊本地震から10年という節目を前に、益城町が掲げる「住み続けたい・次世代に引き継ぎたいまち」の実現と、町民一人ひとりのウェルビーイング向上、そして持続可能なまちづくりに寄与することを目指す。

地域コーディネーター募集のねらい・募集方法

どのような方を地域コーディネーターとして募集したか

広範なビジョンの普及啓発と取組の実践を可能にするをねらいとして、子育て支援の実践者、地域食堂の主宰者、幼児教育・保育施設の関係者、地域活動に積極的な方など、益城町内で地域に根差して活動している（活動していく）多様な背景を持つ人材を地域コーディネーターとして選出した。

募集方法

当社及び益城町の職員のつながりのあった方で、上記のねらいに合致する方を候補者として選定し、本事業について案内の上、地域コーディネーターになってもらえないか打診した。



活動の運営体制・工夫

地域コーディネーター事業の運営体制

地域コーディネーターが本事業の研修や事業に取り組むやすいよう、法人スタッフが各種連絡・調整や企画提案など、全面的にサポートを行った。

地域コーディネーター同士のつながりを創るための工夫

- ・事前勉強会や研修後のフォローアップミーティングを実施した。
- ・月に一回定期ミーティングを開催し、地域コーディネーターによる活動報告や課題共有、今後の活動に向けた意見交換を行った（対面およびオンライン）。

地域コーディネーターのメンバー構成

- ・地域食堂主宰者
- ・社会福祉法人 理事長
- ・心理カウンセラー/ネイチャーゲームリーダー
- ・益城町人権擁護委員/男女共同参画社会推進懇話会委員
- ・児童発達支援保育士
- ・益城町図書館 館長
- ・ベビーシッター
- ・法人スタッフ

8名が本事業に参画し、それぞれの立場を活かして活動を展開

ミュージズ
プランニング打診・選出、
活動をバックアップ

地域コーディネーター

各自の立場を活かした
活動を展開

各コーディネーターの活動を通じて感じていること

団体職員の方の声

Q：地域コーディネーターの方々の活動を支援するにあたって、どのようなことを意識されていましたか？

月1回の定例会で横の繋がりを構築するほか、イベント出展を全員で取り組むことで、チームの一体感も生まれました。個別活動については、企画構成や質の担保に向けた事務局の伴走支援体制を大切にしました。

Q：地域コーディネーターの方々の活動をご覧になる中で、どのようなことを感じましたか？

事業後もコーディネーターが活動を継続する予定があり、地域に持続的な体制の芽生えを感じました。熊本市コーディネーターとの交流もでき、今後さらにネットワークが広がっていくことを期待しています。

Q：今後、この活動を広げていくためにはどのようなことが必要だと感じますか？

コーディネーターには行政の協力と継続的育成や相談できる場、親子を含む地域の人には体験を通じてビジョンを体感できる仕組みが必要だと感じています。



有限会社ミュージズプランニング

有限会社ミュージズプランニングの紹介

ミュージズプランニングは温かなコミュニケーションの創出を通して人々の笑顔をつなぐプランニングカンパニーである。多くの媒体を長年手がけてきた、企画・制作・編集力を生かした情報発信・交流のお手伝い、自分らしく働く・暮らす女性を応援するための、情報発信や再就職・起業を支援するセミナー、講座などを実施している。

Muse Planning

取組事例① のんびり＆すこやかブースin「ましきWomen'sフェス」

その他
地域住民

●取組内容

益城町主催の「ましきWomen'sフェス」で、地域の人にビジョンを知ってもらうことを目的に、啓発ブースを出展。こどもが参加しやすい手形アートの大型パネルを設置した。育ちの木のイラストが描かれた段ボールパネルに0～2歳、3～4歳...と年齢別に手形を押してもらい、町内のこどもたちの成長を手形で見える化した。かわいらしい雰囲気のあるボードにすることですべての世代が立ち寄りやすい空間にし、対象年齢外のこどもや大人たちもメッセージや夢などを書き込んでもらう交流の場をつくった。

●活動の成果

- ・手形やイラストを通じて、地域全体でこどもの成長を応援する機運を醸成した。
- ・孫育て世代の地域住民には、リーフレット等でビジョンの説明を行い、協力的な意見や好意的な反応が得られた。
- ・出展を通して町内で活動する多様な層とつながり、ビジョンの啓発の取り組みを伝えるきっかけもなった。

●今後の展開

益城町ならではの「人の温かさ」や「人と人との距離の近さ」を生かし、今後も啓発活動を通して、地域のサポーターを増やしていく。



取組事例② おやかひろば

●取組内容

益城町の交流スペースを使い、親子が交流でき、安心して集える場所を毎月提供。愛着を育む親子のふれあい遊びや栄養士・助産師による育児相談の場の提供、0～2歳の親子を対象とした産後ヨガ、ベビーマッサージ、季節の催しなど、各回で参加者同士の会話や交流を促進するとともに、保護者の育児不安の軽減につながる取り組みを行った。

●活動の成果

- ・多世代の交流がうまれるとともに、どのこどもも安心して過ごす場を提供できた。
- ・集団の中でこどもの育つ姿が見られた。
- ・保護者が自身の楽しみや「頼ること」を肯定でき、孤立予防や専門機関への相談にもつながった。
- ・地域コーディネーターとの信頼関係が深まり、育児不安の軽減にもつながった。

●今後の展開

このような居場所での関係づくりを基盤に、専門職や地域資源が横断的に支え合うネットワーク形成を目指したい。公的機関とは異なる「日常のつながり」の中で、親子が安全基地を持って地域で育ち合える体制を強化したい。



地域コーディネーターの声



児童発達支援保育士／みんなの居場所 cote a cote 主宰

Q：なぜ地域コーディネーターになろうと思いましたか？

保育現場で、集団への適応に悩む親子の葛藤に触れ、個々の育ちに寄り添う場を地域に作りたいと活動を始めたものの、一人で届ける支援の限界を感じていました。多様な仲間とフラットに「頼り、頼られながら」支え合える関係を築きたいと考え、コーディネーターのお話に手を挙げました。

Q：地域コーディネーターとして活動する中で、どんな気づきがありましたか？

保護者が自身の楽しみや人に頼ることを肯定できると、お子さんとの関係も安定し、健やかな愛着形成に繋がると実感しました。日常的な場が、既存の制度と地域コミュニティを繋ぎ、共に「育ち」を支え合うための重要な基盤になると再認識しています。

委員からのコメント

熊本地震の被災地である益城町の元気な活動を見させていただき感銘した。

今後の子育てとして大切な交流の場、多世代、そこをコーディネートしていくことなど、私たちのビジョンの啓発は形を変えても続けていくことに意義がある。益城町の活動はこれからの多くの自治体の一助になるものと思われる。是非ともこれらの活動が他の地域に伝播していく事を強く望みたい。

是非とも様々な場所で発表して「100か月ビジョン」が持つ人権や親となる仕組みなど広めてもらいたいと思った。今後の益々の活躍に期待するものである。



社会福祉法人清隆厚生会 理事長
認定こども園ひがしどり園長
坂崎隆浩

取組事例③ ネイチャーゲーム

小中高生

●取組内容

小学校の授業の時間を使い、ネイチャーゲームを通じて、児童・保護者・教職員の心を開くきっかけを創り、学校・家庭・地域のつながりを深める取り組みを行った。親子で楽しめる工夫をしたり、活動後の対話の時間に親子間・保護者間の交流を促した。参加親子2～3組にゲームリーダーを体験してもらい、主体的な参加を通じて集団のまとめ方、関わり方の実践も行った。また、ビジョンの説明と啓発品（ティッシュ）を配布した。

●活動の成果

- ・屋外の開放的な環境で心とからだをゆるめることで自然と会話が生まれ、あたたかなつながりと安心感が育まれた。
- ・「こどもの発見する力」を再認識する機会となった。授業参観とは違うこどもの学校での姿に、保護者からも「安心して見守ることができた」と非常に高い満足度を得た。
- ・父親の参加も多く、保護者同士がゆっくり話し、つながりを感じる機会となった。

●今後の展開

校長との対話から多世代交流の継続が決定。今後は学校ボランティア、民生委員、教育委員等も巻き込み、地域全体で育ちを支える場を目指していく。



小学生

- ・落ち葉がひらひら踊るみたいだった
- ・お母さんたちも一緒にうれしかった
- ・知らないあそび、自然のあそびを教えてくれて楽しかった



活動に参加した方の様子

保護者

- ・人見知りだと思っていた我が子が友達と関わる姿を見て安心した
- ・目を閉じて音を数える活動で、風を感じ心地よくなった
- ・普段なかなか話せない保護者と話せる機会になった

教員

- ・親子の様子を一緒に見られる貴重な機会になった
- ・こどもたちの笑顔が印象的だった

地域コーディネーターの声

Q：取組を進める中で、苦労した点や課題を乗り越えた方法などを教えてください。

学校へビジョンの趣旨を説明する際、十分にビジョンが浸透していない中での対話に難しさを感じました。しかし、丁寧な説明と実際の活動を通して、事前の相互理解が広まるほど活動の導入がよりスムーズになるという、今後に活かせる学びを得ることができました。

Q：この取組によって得られた成果を、今後の活動にどのように生かしていきたいですか？

学校や地域、保育園、PTA等と連携し、継続的な機会創出を目指します。学校へ行きづらさを感じる子や子育てに不安を持つ保護者も参加しやすい、やさしく開かれた場づくりを意識して、人と人がゆるやかにつながり、「ひとりじゃない」と思える地域づくりに今後も取り組みます。



ネイチャーゲームリーダー

実践のポイント ～どのように様々な地域住民に活動に参加してもらうか～

- ① イベント出展や、SNSでの発信、本事業およびコーディネーター紹介のパネル・チラシの配布など、幅広い層を想定して多様な手法で周知した。
- ② 学校の授業や親子の集まりなどヘアウトリーチすることで、日常の導線上で参加者がビジョンを体感し、安心して話を聞いてもらえる機会を活用した。
- ③ 多様な背景を持つ人材をコーディネーターとして選出。各自の人脈や活動を生かして行政や学校、企業等へビジョンを伝えた。

地域コーディネーター養成事業に取り組んだことによる成果・課題

- ・活動を通して、本事業の重要性への理解は得られたものの、日常生活での具体的な行動の変化や定着を促す仕組みづくりが課題となっている。

今後の活動の展望

- ・これまでの活動を通して築いてきた人と人とのつながりを大切に、地域コーディネーターそれぞれの強みを生かしながら、規模にとらわれない次の取組へつなげていく。
- ・今後は、性別や世代を問わず、誰もが「自分ごと」として考えながら理解を深められる「こどもまんなか啓発カード」の作成を検討している。意見交換型で実施できる内容とし、地域コーディネーター自らが講師を務めることで、専門スキルの向上と活動の幅を広げ、地域における支援の核としての信頼を確立できる効果を期待している。

2 活動のノウハウ集

①「はじめの100か月の育ちビジョン」をわかりやすく伝えるための工夫

<保護者にわかりやすく伝える工夫>

- 既存の子育て支援の場を活用し、リーフレットを用いながら、**専門用語を避けて分かりやすい言葉で伝える**ことで、保護者がビジョンをイメージしやすくなるよう工夫している。
- イベント開催時、動画やパンフレット等の視覚ツールで説明することに加え、**地域住民が子育てに協力的に活動している様子を実際に見てもらうことで体感的な理解**を促している。
- 「はじめの100か月の育ちビジョン」を物語仕立てにし、日常の身近な例え話を交えて伝えることで、保護者の理解を促している。

▼パンフレット



<地域住民にわかりやすく伝える工夫>

- 行政の公式LINEや地域の大学といった**信頼性の高い媒体で周知**するとともに、大学施設を「あそびの拠点」として開放し、ビジョンが目指す**「地域で支え合う環境」を具体的に示す**ことで、その理念をわかりやすく伝えている。
- 多数の人が集まる**地域のイベントや学校、図書館等の多様な場**において、**動画放映とパンフレットを活用したコーディネーターによる個別説明**を実施した上で、**ワークショップや意見交換を通じてビジョンを「自分事」として捉える機会**を設け、幅広い層への理解を促している。

<ビジョンを説明するときに心がけていること>

- 抽象的な理念を日常の**具体的な場面に置き換えて説明**することを心がける一方、**繰り返し伝えることで徐々に身近なものとして受け止めて**もらえるよう努めている。
- 日常に寄り添った言葉への言い換えや動画等の視覚的な工夫に加え、まず**「楽しい体験」を提供してから本質を伝えるプログラム設計**によって、**参加への心理的ハードルを下げつつ理解を促している**。

▼保護者向け動画



▶関心層向け動画



<こどもをはじめ、誰にでもにもわかりやすくビジョンを伝える工夫>

- 大人が「教える」のではなく**「一緒に遊ぶ」存在として関わったり、多様な人々が自然に交流したりする「体験の場」をつくることで、ビジョンの理念を学ぶのではなく無理なく体感**できるようにしている。
- イベント実施にあたり、**その活動のねらいを事前にビジョンの思いと重ねて説明**することで、「100か月」という言葉にとらわれず、**全世代が自分事として捉えられるよう工夫**している。

②どのように活動を始めたら良いか？

これまでの活動実績や、どのような人がコーディネーターを担うか、あるいは、どのような人をターゲットとしたいかに応じて、考えてみることができます。

- ① コーディネート活動の実績・知見がなくとも、新たに取組を始めてみる
- ② 今ある活動を生かし、さらに多くの人が関われるように活動を発展させる
- ③ これまでのコーディネートの実績や知見を活かしつつ、今までつながっていなかったターゲット層に向けて新たな活動を立ち上げる
- ④ このようなコーディネート機能を発揮する人を増やすための取組
(コーディネーターのための「コーディネート」)

今年度のモデル団体の取組に触れつつ、次のページで詳しく解説していきます。

2 活動のノウハウ集

②どのように活動を始めたら良いか？

①コーディネート活動の実績・知見がなくとも、新たに取り組を始めてみる

→宮城県富谷市、株式会社ネクストビート

コーディネートの視点

- ✓ こども・保護者等と「日頃こどもと関わる機会が少ない人」の交流を生み出すために、新たに「関わり場」を企画し、参加する人を集めて実施する（＝人を呼び込むコーディネート）など

とはいっても、全くつながりがないところから活動を立ち上げるのは大変です。

- 富谷市では、前年度にシルバー人材センターの手仕事を企業及び学生の協力を得て、多くの人に発表する取組をしていました。今年は「はじめの100か月」の親子に参加してもらうという工夫を加え、今回の取組が実現しました。
- ネクストビートでは、もともと同社とつながりのあった一般社団法人あそび庁が、秋草短期大学で授業を行っていた縁をもとに、秋草短期大学の学生がコーディネーターとなり、あそび庁の持つナレッジを活かしつつ、活動を実施しています。

実践の ポイント

まずは今あるネットワークを振り返り、そこに一工夫加えることで、新たなつながり場が出来るかもしれません。

②今ある活動を生かし、さらに多くの人に関われるように活動を発展させる

→愛知県長久手市、特定非営利活動法人びーのびーの

コーディネートの視点

- ✓ こども・保護者等や地域住民など、これまで「関わり場」に参加していなかった人に参加を促したり活動に巻き込んでいく（＝人を呼び込むコーディネート）
- ✓ その場で行われている交流やこども・保護者等との関わりが、より良いものになるよう工夫する（＝関わりの密度を高めたり、質を向上させるためのコーディネート）
- 長久手市では、前年度までに様々な活動をコーディネートしてきたNPO法人ながいくの取組を、自団体以外のさらに多くの場で実施できるよう、市や大学向けのマニュアルを作成しており、地域全体でこどもの成長を喜び合える社会づくりを広げようと取り組んでいます。
また地域住民のコーディネーターが活動に加わったことで、これまで繋がりのなかった郵便局などとの新たな連携も生まれました。
- びーのびーのでは、同団体が実施する乳幼児ふれあい体験やこども食堂という活動拠点を活かし、地域住民のコーディネーターがビジョンをわかりやすく伝えたり、コーディネーター自身のネットワークを活かして新たな地域住民を活動に呼び込むことで、これまでつながりのなかった地域住民とこども・保護者等が関わる機会が生まれています。

実践の ポイント

いずれの事例も、今ある活動や活動拠点を最大限に活かして、取組を広げている点がポイントです。また団体職員のみならず、地域住民がコーディネーターとして参加したことで、これまでにない活動の広がりが生まれたことも注目すべき点です。

2 活動のノウハウ集

②どのように活動を始めたら良いか？

③これまでのコーディネートの実績や知見を活かしつつ、今までつながっていなかったターゲット層に向けて新たな活動を立ち上げる

→石川県野々市市、学校法人柿沼学園、学校法人仙台こひつじ学園

コーディネートの視点

- ✓ これまで活動に参加していなかったターゲットに向けて、今実施している活動とは別に、新たな「関わり場」を立ち上げる（＝新たなターゲット層に向けたコーディネート）
- 野々市市では前年度のコーディネーター事業の中で、パパ世代や高齢者世代へのリーチが少なかったことに課題意識を持ち、今年度は現役パパや大学生、高齢者との交流企画を実施できる園長先生をコーディネーターとして養成し、リーチの少なかった層に向けた活動を企画・実施しました。
- 柿沼学園ではこれまでも地域住民と園がつながる活動を実践してきましたが、今回の事業では、新たに小中学生が園児と触れあう活動や、保護者が集中してワークショップを楽しめるよう、高校生が傍で子どもたちを見守る活動を展開するなど、これまでになかった交流の形を生み出しています。
- こひつじ学園ではこれまでも「コミュニティチャー（コミちゃん）」制度を設けるなど、地域に開かれた園として活動をしていましたが、小中学生をプレイリーダーとして園に受け入れる「あそびの先輩」、高校生が園で探究的な活動を実施する「高校生のチャレンジ」など、さらに幅広い世代の人と、こども園とのつながりを生むための取組を実施しています。

実践のポイント

これまでに実施してきた活動成果をベースとしつつ、「こどもまんがチャート」（p4）も活用しながら、新たなターゲット層がいらないか、あるいはさらに多くの人との交流を生み出すために新たな取組が実施できないか、検討してみることが有効です。

④このようなコーディネート機能を発揮する人を増やすための取組（コーディネーターのための「コーディネート」）

→特定非営利活動法人新座子育てネットワーク、有限会社ミューズプランニング、株式会社エルパティオ

コーディネートの視点

- ✓ 取組を広げていくために、こういった活動に関心を持っている人に声をかけ、自団体の拠点となっている地域以外でも、活動を展開してもらえるように働きかける（＝コーディネーターを増やすコーディネート）
- ✓ 活動を行うコーディネーターに対し、コーディネーター同士の交流の場を提供したり、自法人で持っているスキルや活動に必要な情報、資料を提供する（＝コーディネーターを支えるコーディネート）
- 新座子育てネットワークでは、全国様々な地域で活躍するキーマンたちがコーディネーターとして活動できるよう、昨年度の活動実績で得られたノウハウをもとに、今年度は新座子育てネットワークがコーディネーターへの情報提供や相談に応じ、活動の後方支援を行っています。
- ミューズプランニングでは、昨年度の活動地域である熊本市から場所を変え、今年は益城町で新たなコーディネーターと共に活動を実施。地域特性の違いも踏まえつつ、昨年度得られた経験をもとに、新たな地域のコーディネーターの取組を支援し、昨年度のコーディネーターとの交流も行っています。
- エルパティオでは、松山市を中心に愛媛県内で子育て支援などの活動に取り組む人が、地域コーディネーターとして活動できるよう、独自講座や交流会などを通じて、行政やまちづくり団体と連携したり、コーディネーター同士の横のつながりを創るなどして、活動の支援を行っています。

実践のポイント

地域コーディネーターが孤立してしまったり、1人で悩みを抱え込んでしまうことがないように、各団体の取組事例にあるように、必要な情報提供や、地域コーディネーター同士のネットワーク形成を図っていくことも大切です。

3， 地域コーディネーター研修 地方キャラバンの開催報告



1 「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーターへの研修

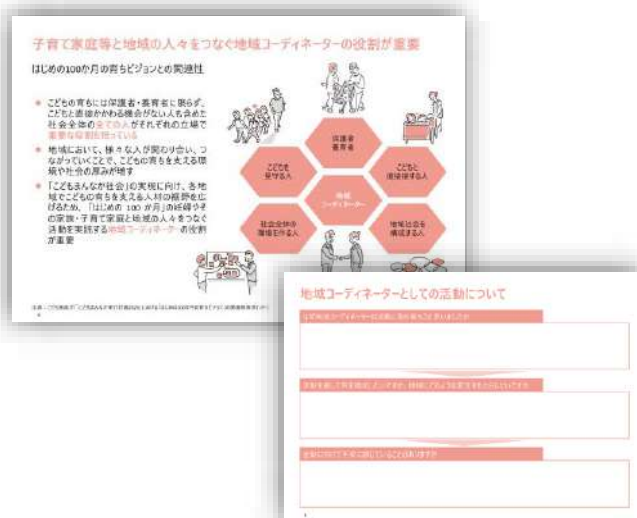
地域コーディネーター研修の概要

モデル団体において選出された地域コーディネーターの候補者を対象に、研修を実施した。

研修はオンデマンド形式の事前学習と、2回の集合研修を行った。事前学習では地域コーディネーターとして活動を行うために必要な基礎知識を学び、2回の集合研修では、実践者による活動事例の共有や、受講者同士のディスカッションなどを通して、各地域でコーディネート活動を実施するための企画書の作成に取り組んだ。

事前学習（オンデマンド）

- 「はじめの100か月の育ちビジョン」紹介動画
- 事業概要・今年度のスケジュール
- こどもや保護者を取り巻く環境の変化
 1. こどもの成育環境・こどもの育ちの質への着目
 2. 家族構成の変化、子育て環境・地域社会の変化
 3. こどもの育ちを社会全体で支える必要性
- 地域コーディネーターの活動事例



集合研修1回目（対面/オンライン）

- 実践者による活動事例の共有
 - ・学校法人柿沼学園理事長 柿沼平太郎氏
 - ・特定非営利活動法人びーのびーの 理事長 奥山千鶴子氏
 - ・特定非営利活動法人 アクションポート横浜 代表理事 高城芳之氏
- 活動内容の企画に向けた個人ワーク及びグループワーク
 1. 地域の課題、こども・保護者のニーズの検討
 2. 地域資源の活用・連携方法の検討
 3. 活動の企画案の検討、企画書の作成

集合研修2回目（オンライン）

- 地域での活動開始に向けた講義
文部科学省 国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官
(併)社会教育実践研究センター 社会教育調査官 志々田まなみ氏
- 活動の実践に向けた個人ワーク及びグループワーク
 1. 企画・活動段階の留意事項の検討
 2. 活動の振り返り方法の検討

参加した地域コーディネーターからのコメント・感想

- ・有識者からの講義を踏まえ、小さなことからでもコツコツと継続的な活動をしていきたいです。
- ・実践団体の話を通して、非常に肌感を感じることができ役に立ちました。ありがとうございました。
- ・実践者の方には具体的な実例をもとにお話ししていただき、私の地域もこうなりたいと思える内容でした！

2 地方キャラバンの開催について

全国各地の「地域コーディネーター」による活動事例を紹介し、「はじめての100か月」を社会全体で支える取組の全国展開を図るため、大阪・宮城・東京の全国3か所で「地方キャラバン」を開催した。

第1回 大阪キャラバン（2026年1月27日）

全体プログラム

- 施策の現状・本事業の概要
- 有識者講演
- モデル団体による実践事例報告・パネルディスカッション
- 地域コーディネーターとともに考えるワークショップ
- モデル団体によるポスター発表



テーマ：「はじめての100か月」の親子とつながり
支えていくためには

当日は、横浜市立大学国際教養学部の三輪教授をお呼びし、「『はじめての100か月』の親子を育むま
ちの役割や機能について—まちづくりの視点から—」
というテーマについてご講演をいただいた。

モデル団体による実践事例報告では、
宮城県富谷市・有限会社ミューズプランニング・特定
非営利活動法人びーのびーの3団体にご登壇いた
だき、活動内容についてご発表いただいた。

その後、「『はじめての100か月』の親子とつながり、
支えていくためには」をテーマに、三輪教授と登壇団
体によるパネルディスカッションを行った。

ワークショップでは、「地域交流の場に参加してい
ない「はじめての100か月」の親子へどのようにアプ
ローチしたらよいか？効果的な情報発信方法とは？」、
「地域交流に参加した親子・地域住民等が、その後
も継続的に活動に関わってもらえるようにはどうし
たらよいか？」という2つのテーマについて参加者同士で
議論を行った。

ポスター発表

R7モデル団体

- 宮城県富谷市
- 特定非営利活動法人びーのびーの
- 株式会社エルパティオ
- 有限会社ミューズプランニング

R6モデル団体

- 特定非営利活動法人アンジュ・ママン
- 特定非営利活動法人棚田LOVERS

2 地方キャラバンの開催について

第2回 宮城キャラバン（2026年2月12日）

全体プログラム

- 施策の現状・本事業の概要
- 有識者講演
- モデル団体による実践事例報告・パネルディスカッション
- 地域コーディネーターとともに考えるワークショップ
- モデル団体によるポスター発表



テーマ：『はじめての100か月』を支える
地域の厚み・広がりを生み出していくために

当日は、昭和薬科大学臨床心理学研究所の吉永教授をお呼びし、『『はじめての100か月』の親子の豊かな育ちを支えるまちの資源・連携』というテーマについてご講演をいただいた。

モデル団体による実践事例報告では、学校法人仙台こひつじ学園・株式会社ネクストビート・石川県野々市市の3団体にご登壇いただき、本年度事業において実施した活動内容についてご発表いただいた。

その後、『『はじめての100か月』を支える地域の厚み・広がりを生み出していくために』をテーマに、吉永教授と登壇団体によるパネルディスカッションを行った。

ワークショップでは、「小中学生や高校生、大学生等を活動に巻き込むには？」というテーマについて参加者同士で議論を行った。

ポスター発表

R7モデル団体

- 学校法人仙台こひつじ学園
- 株式会社ネクストビート
- 石川県野々市市
- 宮城県富谷市
- 特定非営利活動法人びーのびーの
- 株式会社エルパティオ
- 特定非営利活動法人新座子育てネットワーク

R6モデル団体

- 特定非営利活動法人アンジュ・ママン

2 地方キャラバンの開催について

第3回 東京キャラバン（2026年2月27日）

全体プログラム

- 施策の現状・本事業の概要
- 有識者講演
- モデル団体による実践事例報告・パネルディスカッション
- 地域コーディネーターとともに考えるワークショップ
- モデル団体によるポスター発表



ポスター発表

R7モデル団体

- 宮城県富谷市
- 特定非営利活動法人新座子育てネットワーク
- 学校法人柿沼学園
- 株式会社エルパティオ

R6モデル団体

- 特定非営利活動法人アンジュ・ママン



テーマ：「はじめの100か月」を起点とした地域づくりを持続可能なものとしていくためには

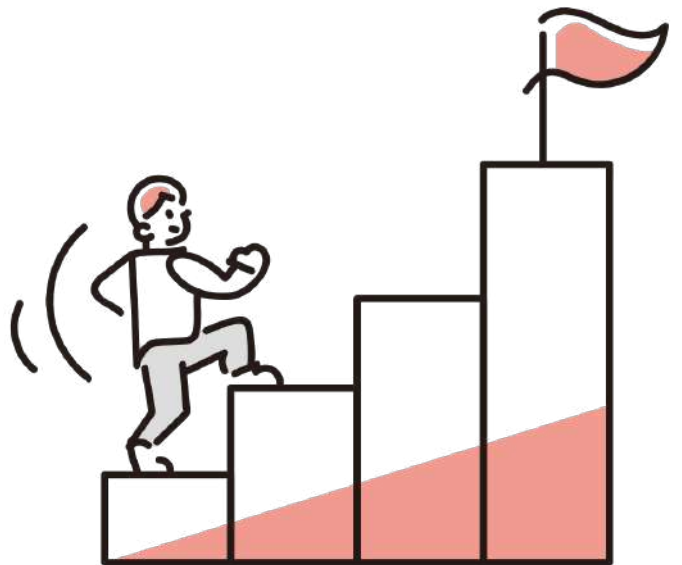
当日は、横浜市立大学国際教養学部の三輪教授をお呼びし、「『こどもまんなか』のまちを育てる—まち保育の実践から—」というテーマについてご講演をいただいた。

モデル団体による実践事例報告では、愛知県長久手市・特定非営利活動法人新座子育てネットワーク・学校法人柿沼学園・株式会社エルパティオの4団体にご登壇いただき、本年度事業において実施した活動内容についてご発表いただいた。

その後、「『はじめの100か月』を起点とした地域づくりを持続可能なものとしていくためには」をテーマに、三輪教授と登壇団体によるパネルディスカッションを行った。

ワークショップでは、「『こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す』ために、どのような関係機関を巻き込んでいくことが重要か」、「活動を地域に根付かせ、継続していくための工夫、活動のアイデア」という2つのテーマについて参加者同士で議論を行った。

4, 「はじめの100か月の育ちビジョン」 の更なる推進のために



1 「はじめの100か月の育ちビジョン」の更なる推進のために

「はじめの100か月の育ちビジョン」関連資料の紹介

「はじめの100か月の育ちビジョン」を多くの方に知ってもらい、ビジョンに基づく取組を地域全体で推進するため、こども家庭庁が作成した関連資料を紹介する。これらの資料を活動に役立てていただき、各地域でビジョンの実現に向けた取組がさらに推進されていくことを願っている。

▼「はじめの100か月の育ちビジョン」HP



1. 「はじめの100か月の育ちビジョン」を知りたい全ての方へ

○パンフレット



[「はじめの100か月の育ちビジョン」パンフレット](#)

○紹介動画



[「はじめの100か月の育ちビジョン」紹介動画](#)

○リーフレット



[「はじめの100か月の育ちビジョン」リーフレット](#)

○ポスター



[「はじめの100か月の育ちビジョン」ポスター（PDF版）（PDF/1.9MB）](#)

2. 保護者のみなさんへ



[保護者の方向け動画・ハンドブックなど](#)

3. 地域住民のみなさんへ



[社会の全ての方向け動画・ハンドブックなど](#)

4. 自治体、幼児教育・保育施設、子育て支援施設等でこどもの育ちを支えるみなさんへ

☆自治体職員・こどもに関わる専門職等の研修などで



[専門職の方向け研修動画・ガイドブックなど](#)

☆「アタッチメント」「遊びと体験」の重要性について



[調査研究概要（乳幼児との関わり、乳幼児の遊びと体験）](#)

☆専門的な立場でこどもの育ちを支える皆さんへ
他の職種や地域住民と協働するための取組事例集



[専門職の方向け研修動画・ガイドブックなど](#)

☆基礎自治体向けの手引き



[科学的知見の調査研究 | こども家庭庁](#)

5. 企業関係者のみなさんへ



[社会の全ての方向け動画・ハンドブックなど](#)

6. こども・若者のみなさんへ



[社会の全ての方向け動画・ハンドブックなど](#)

2 監修者（事業運営委員）の紹介

事業運営委員会の設置

本事業を専門的かつ多角的な視点から支え、その方向性と質を担保するため、外部の有識者からなる事業運営委員会を設置した。

事業運営委員は、本事業への深い理解を基盤に、地域連携、人材育成、乳幼児の発達といった活動に不可欠な各分野の専門家で構成されている。

事業運営委員会では、事業の理念が各モデル団体や地域コーディネーターの活動に反映されるよう助言するとともに、地域の実情に即した実践的な活動設計、効果的な人材育成、乳幼児の育ちへの専門的配慮など、複合的な視点から事業全体を検討し、助言をいただいた。

事業運営委員の皆様から、本事業の総括としてご寄稿いただいた。

各氏には、現地視察や関係者へのヒアリング等を通じて感じられた、地域の取組に対する今後の展望や、本事業を通じて見えてきた、地域コーディネーターに対する今後の期待や、今後果たしていくことが望まれる役割等について、それぞれの専門的見地から論じていただいている。

事業運営委員からのメッセージ



社会福祉法人清隆厚生会 理事長
認定こども園ひがしどおり 園長
坂崎 隆浩

出生数低下による人口減少・過疎化は著しく「静かな有事」は確実に進んでいる。「はじめの100か月の育ちビジョン」は、そんなこどもの世界における基本を示している。(特に愛着と体験は重要)これからの社会や地域の中でこのビジョンを展開するのは、SNSを中心とした一方的な情報と共に、人と触れ合う事によって伝達されていく方法がある。現在、日本では子育ての社会化(その多くは金額保障をしている)を進めているが、その核となるのは子育て文化の継承だと考えている。それは年齢を越えての活動のように、古い価値観の中に新しい価値観が組み込まれることによって、その時代の子育てを作ることになる。よってその事業がモデリングしていることは、地域や多くの人の参考になると思われる。大事な事は打ち上げ花火にならず、出来るだけ「事業継続が出来る事」として進めることが大事であろう。その為には地域のコーディネーターの育成は大きな課題である。当分の感、これらの事業が必要であることを付記しておきたい。

事業運営委員からのメッセージ



NPO法人グリーンパパプロジェクト 代表理事
吉田 大樹

2年目を迎えた地域コーディネーター養成事業では、受託団体として企業・団体のほか自治体も加わり、より多様な事業展開が見受けられた。受託団体がこれまで蓄積してきたノウハウやスキルを生かし、『はじめの100か月の育ちビジョン』が目指している「こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す」ことを実現するため、地域資源や地域人材を活用・動員して受託団体や地域コーディネーターの皆さんが実践する姿は、どの事例をとっても評価できるものであった。そして、前年度以上に洗練された活動事例を目の当たりにすることもできた。

その中で、受託団体や地域コーディネーターが果たす役割について、事業を展開する上での事例のタイプが具体化され、今後のさらなる展望が見えてきた。今後は、モデル事業としてこれまで実践されてきた様々な活動事例の横展開が図られるとともに、これまで地域のこども・子育て分野にあまり関わりが持っていなかった企業・団体に加えて、例えばまちづくりに積極的に取り組んでいる活動などとも連携を深めていくことなど、「厚みを増す」ことへのさらなる深化を追求してもらいたい。



文部科学省 国立教育政策研究所
生涯学習政策研究部 総括研究官
社会教育実践研究センター 社会教育調査官
志々田 まなみ

子育てをめぐる価値観は千差万別です。それは、自らが育った環境や子育てに関わってきた経験等と、とても深く関係しているためです。気心の知れた仲間どうしであっても、子育てについてどんなことを悩みとして感じているか、それをどのように解決したいと思っているか、何を優先して進めたいと感じているか、といったことについて伝え合ったり、本音で語り合ったり、価値をすり合わせていったりすることはとても難しい、というお話をよく耳にします。

「はじめの100か月の育ちビジョン」は、多様な立場や世代性、経験や技術をもつ者どうしが、子育てをめぐる価値観について会話し始める糸口になったり、お互いの違いを冷静に意識できるきっかけにつながったりします。さらには、「はじめの100か月の育ちビジョン」を学びあいながら活動を進めることで、立場の違いを超えて積極的に声掛けをしたり、一歩踏み込んだアドバイスをしあうことができるチームへと成熟していくことにも役立ったりします。完全に理解し合うことは難しくても、同じ方向を見つめながらともに前に進んでいくために、「はじめの100か月の育ちビジョン」を役立てていただければと願っています。

2 はじめの100か月の育ちビジョン」の更なる推進のために

事業運営委員からのメッセージ



聖心女子大学 現代教養学部 教育学科 教授
高嶋 景子

こどもたちの豊かな育ちには、「はじめの100か月の育ちビジョン」で示されているように、「安心と挑戦の循環」を通して、多様な「遊びと体験」ができる環境が求められますが、そのような「安心と挑戦の循環」が支えられるには、こどもの傍らにいたる大人たち自身の「安心と挑戦」が支えられていることも必要となります。本事業では、地域コーディネーターが企画・運営する様々な活動を通して、こどもや保護者たちが、地域の多様な人々や場と出会い、交流する中で、様々な支え合う関係（安心）ややってみたこと（挑戦）が生まれていました。そして、その交流のなかでは、支援する側・される側というような一方的な関係ではなく、そこに参加する多様な人々が、それぞれの立場から他者や地域と繋がり、自分なりに貢献することでコミュニティへの関わりを深めるきっかけにもなっている様子が見えてきました。地域コーディネーターとは、そのようにこどもをまんなかに多様な人々が共に支え合う「地域共生社会」の創り手でもあり、今後の活躍がますます期待されます。



玉川大学 教育学部 乳幼児発達学科 講師
上田 よう子

タイトルや企画づくりの段階から、地域の皆で「親子のために何ができるのか」を真剣に模索すること、その過程そのものがすでに子育て支援の始まりであると感じました。本事業には、既存の枠やつながりを越えた柔軟な発想から、新たな団体との連携やつながりが生まれていく可能性の面白さがあります。また、普段関わる機会の少ない学生を巻き込む際には、学生やスタッフが「実施していて楽しいと感じられる要素」や「自分たちの意見が反映されること」が含まれていることが大切であると感じました。そうした楽しさや自己効力感を体験している開催側の人々の姿は、自然と参加者にも伝わり、場全体にあたたかな雰囲気を生み出していくからです。「喜んでもらえた」「自分たちも楽しかった」経験を通して、地域の子育てを自分たちの暮らす地域の出来事として捉え、「自分たちにも何かできるかもしれない」という視点が育まれていくことを期待しています。



幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン
(はじめての100か月の育ちビジョン)



令和7年度「はじめての100か月の育ちビジョン」
地域コーディネーター養成事業 モデル事例集

発行 : 令和8年3月

発行者 : こども家庭庁

委託事業者 : 有限責任監査法人トーマツ

無断転載・複製・複写を禁じます。

こどもまんなか
こども家庭庁